

KULIC

17

1983. 11

慶應義塾大学研究・教育情報センター

KULIC 17

目 次

日吉新図書館建設計画

- | | |
|------------------------------|---------|
| 1……………日吉新図書館への期待—図書館—新書斎・文房論 | 衛 藤 駿 |
| 3……………日吉新図書館設計画の経緯 | 柳 屋 良 博 |
| 9……………慶應義塾大学日吉新図書館・事務棟設計メモ | 楓 文 彦 |
| 17……………日吉新図書館におけるサービスの概要 | 小 川 治 之 |

- | | |
|------------------------|---------|
| 23……………本との出会い<ティー・ルーム> | 石 田 哲 浩 |
|------------------------|---------|

情報センター機械化計画

- | | |
|---------------------------|---------|
| 24……………機械化計画の展望 | 安 西 郁 夫 |
| 26……………研究・教育情報センターの業務機械化 | 長 島 敏 樹 |
| 32……………わが国大学図書館における機械化の現状 | 渡 部 満 彦 |

- | | |
|-----------------------------|---------|
| 38……………I F L A 余滴<スタッフ・ルーム> | 渋 川 雅 俊 |
|-----------------------------|---------|

KULIC のノウハウ

- | | |
|---|---------|
| 39……………BDS (Book Detection System) とインベントリー | 加 藤 好 郎 |
| 41……………指定出版社による一括購入方式のその後 | 石 黒 敦 子 |
| 43……………目録利用案内 | 高 谷 康 子 |

- | | |
|----------------------------|---------|
| 46……………原風景としての図書館<ティー・ルーム> | 伊 藤 行 雄 |
|----------------------------|---------|

- | | |
|----------------------------|---------|
| 47……………インベントリー雑感<スタッフ・ルーム> | 玉 井 裕 子 |
|----------------------------|---------|

資 料

- | |
|--|
| 48……………研究・教育情報センターに関する書誌, 1982—1983. 9 |
| 49……………図書館関係英語文献の和文抄訳リスト |
| 51……………スタッフによる論文発表・研究発表 |
| 54……………年次統計要覧<昭和57年度> |

- | | | |
|-------------|-----------|-------------|
| 58……………編集後記 | <表紙> 孫福 弘 | <カット> 日下部寿子 |
|-------------|-----------|-------------|

日吉新図書館建設計画

日吉新図書館への期待 図書館＝新書齋・文房論

衛 藤 駿
(日吉情報センター所長)

この一文が読者の目にふれる頃には、新図書館建設工事の槌音が、日吉台にこだましていることだろう。

建築本体に関連したハードがらみの検討課題には時限があり、日々大局的判断をせまられている一方、ソフト面では、使い勝手の問題だけに、これまたきめこまかい対応が要請されているのが現状である。しかしこれらについては、有能な専門職員の経験と、ワーキング・グループ諸氏の体験的識見によって鋭意善処されているのであり、かならずや血のかよった図書館が誕生するものと信じている。

三田の新図書館がすでに完成後一年余の実績をもっているので、日吉で直面するすべての課題を実地に当て検討することができるのは幸いであり、後発の利点を十分活用しているところである。

日吉の場合、学習図書館としての活性化が、大きな目標のひとつである。いったいそのあり方についての基本的理念とはどのようなものであるべきなのか。ここでは東洋における書齋ないしは文房の現代版としての、新図書館への期待を描出してみたいと思う。

書齋とは、文字通り書物をまつり、おがむところである。書物が、人間の知的所産の凝結したものであれば、真理探求を志す大学人にとっての書齋は、まさに書物を中心とした情報源から、現代を生きる指標を学びとる場所以外のなにものでもない。

書物をまつり、おがむということは、今日では、書物を読者に供し、読者は書物から自からが求めるものを吸収することにほかならない。したがって図書館は、現代における書齋たらしめねばならないのである。

一方、文房は、古来文人や士大夫の精神生活空間であった。それは、書・画・弹琴・吟詩・思索、そして知的遊びの営まれた場所であった。もちろん、読書し、ものを書く場所でもあり、まさに知的生産の工房であったのである。

その主人公である文人の、文房における必需品が文房具である、とくに詩画の制作に必要な、墨・紙・筆・硯が、いわゆる文房四宝であった。この文房四宝には、それぞれの出生と発展があり、材質・形状・種類も多岐多様である。このほかにも、印章・朱肉・硯屏・水滴・書鎮といった小道具から、机案のごとき家具・調度にいたるさまざまなものが、あるものは清雅に、あるものは艶麗なすがたかたちで座右を飾ったのである。

文房・書齋をとりまく環境は、さらに発展し、戸外にひろがり、円窓にうつる月明や、竹影にまでおよぶ。さらには松籟、溪流のせせらぎ、鳥のさえずりから、花香、寒暖など、すべてが文房生活を支配してくるのである。文房には、まさに、色・声・香・味・触といった五感によって体験されるすべての要素が凝結し、精神生活を支えるものとして止揚されたのであった。

そこで日吉新図書館であるが、もちろん環境・位置・外観・機能といった一連の、図書館としてのあるべきすがたはもとよりだが、利用者の一人ひとりを取りまく小空間のそれが、文房・書齋のそれにふさわしいものであることがのぞましいのである。

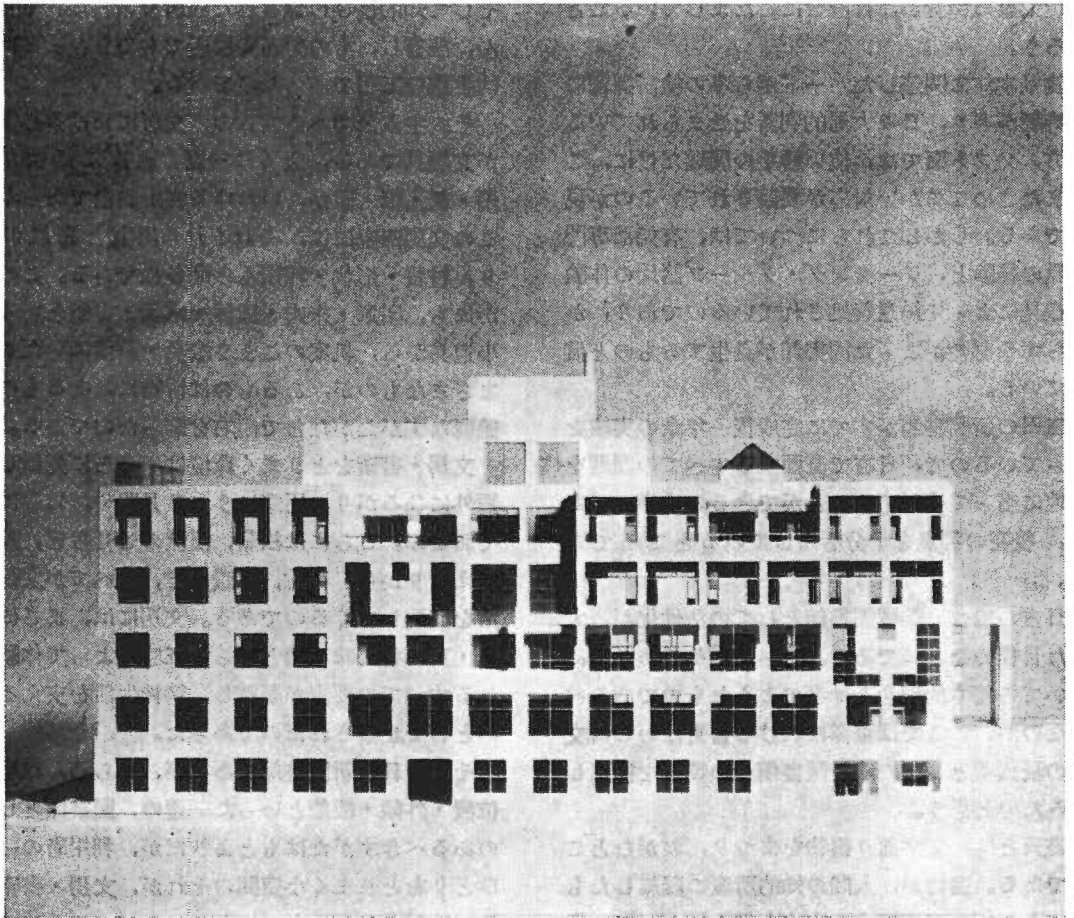
図書館用品、たとえばカード・ボックス、机、椅子、書架などの既製品は、人間工学を基礎に、

機能面が重視されている。それに加えて文房具としての精神面が求められるのだから、デザインは機能を犠牲にしてはならないのではないか。

照明や空調が、蛍の光・窓の雪であって、文明生活に馳れきった現代人にとっては苦痛にちがいないが、精神面における蛍雪の意味は尊重したいと思っている。それは消エネや管理・保守上の配慮にもつながるからであり、騒音は困るが、自然の息吹が館内に漂うことも大切ではないか。

欧米型の大学図書館にみられる外界から隔絶されたかたちで偉容を誇る石造建築にも魅力はあるが、それでも前庭の芝生や、煉瓦を被うアイビーとの調和が、いかに心なごませていることか。

日本のそれは、明かるい、自然に溶けこんだものであってよいのではないか。とすれば、その基本理念は、文房・書齋の心にこそ求められるべきではないだろうか。 (1983.7.6)



南側（イチョウ並木）から見た新図書館

日吉新図書館建設計画の経緯

柳屋良博

(日吉情報センター副所長)

まえがき

昭和10年に大学予科読書室として産声を上げ、昭和11年に第2校舎に移って大学予科図書室となり、戦後の新制大学となってからは、同所で図書館日吉分室と名称を変え、昭和33年義塾創立百年記念事業の一つとして独立棟の藤山記念日吉図書館が新築され、今日に至った。

昭和26年5月、旧日吉寄宿舎北寮を衣がえして発足した大学日吉研究室(人文・社会科学、語学部門)は、昭和39年8月、第4校舎に移転し、旧研に教員研究室を、地下書庫と1階事務室を図書室機能の拠点としたが、昭和42年7月には新研の使用が開始された。自然科学部門・美術・音楽の研究室は、発足時から第2校舎その他に分散配置され、今日に至っている。

昭和47年4月には事務組織である日吉情報センターが発足し、藤山記念日吉図書館と日吉研究室図書室を担当することになった。学生数、蔵書数の増大に伴い、限られた面積の中での閲覧スペースと書庫スペースの配分に苦慮しながら、図書館サービスの近代化が図られてきた。施設としての限界の緊迫化に応じて、幾度か建設計画が立てられたが、機熟さず挫折を重ねるだけであった。

昭和55年6月に始まる日吉図書館建設計画の経緯を語るとき、25年余に及ぶ日吉図書館及び日吉研究室の運営の歩み、実ることのなかった過去の建設計画に触れないわけにはゆかない。紙数の関係で、この前史にあたる部分を割愛したが、「塾監局紀要第10号」に掲載予定の拙稿「日吉の新図書館計画について」で概要を述べたので、これに譲りたい。

1. 日吉問題検討委員会第二作業委員会

日吉における教育研究の諸条件及び施設等の問

題点について、学内各方面の意見を聞き検討を加えてもらい、今後の施策立案の参考としたいとの塾長の意向で日吉問題検討委員会が設置され、昭和54年7月10日、第1回委員会が開催された。委員会は、関係常任理事、各学部長、日吉主任、一般教育委員長、各部門主査4、各学部代表12、日吉情報センター所長、日吉研究室運営委員長、体育研究所代表、学生部長その他で構成され、オブザーバーとして塾長が出席するものであった。

大学に入学した全学部の学生が、専門課程に進学する前の1～2年を過ごす日吉は、彼らに希望を持たせて教育しなければならない場であり、教育の質と研究水準を維持向上させるためには、大学教育における一般教養課程の意義を問わざるを得ない。過去にも、研究・教育計画委員会、日吉主任会議日吉実態等調査委員会、日吉企画施設委員会等が設けられたことはあったが、全塾的な規模の公的委員会によって、日吉問題に的を絞って審議するのは、新制大学発足以来のことであった。

第2回(9月18日)には、①日吉研究室及び研究条件の改善、②一般教育・語学教育のあり方と将来への対応策、③日吉図書館のあり方に関する事項が問題点として提案され、検討されることになった。同時に、焦眉の急を告げていた研究施設への対応のため、日吉研究室増設作業委員会の設置が決まった。その後、日吉における一般教育課程全般に関する問題提起、一般教育の理念及び現行カリキュラムの問題点の検討が行われたが、第7回(昭和55年4月28日)に至り、①カリキュラム上の問題、②組織上の問題、③施設の問題に集約され、検討のための作業委員会設置が決まった。

施設問題としては、図書館・教室・研究室その他があるが、日吉研究室書庫を含めた日吉図書館のあるべき姿の検討が、第二作業委員会の任務であった。委員会は、担当常任理事を議長とし、日吉情報センター所長、副所長、日吉研究室運営委員長、研究室主事、日吉専任教員2、三田の新図書館建設計画の経験者である三田専任教員3、情報センター職員2及び事務局で構成された。カリ

キュラムと組織問題をテーマとする第一作業委員会の審議結果と密接に関係し、その影響を受けるものであったが、独立して検討が進められた。

第1, 2回委員会(6月25日, 7月16日)は、藤山記念日吉図書館を中心とする日吉情報センターの現状と問題点、及び日吉研究室の図書資料・書庫の現状と問題点が報告された。第3回(10月2日)には、日吉図書館の施設、必要と考えられる設備、図書資料の収集・選択の将来像、及び日吉情報センターとの関連という観点から見た研究室資料のあり方・研究室事務室の将来像について構想が述べられた。第4回(11月5日)は、討論のまとめとして、図書館、研究室図書機能、及び両者の関連という3つの局面について、それぞれに固有の問題点を抽出・分析した上で、短期と長期の観点から現実に立脚する問題解決の方向づけを審議した。また、現図書館屋上増築に関する施設部の調査結果が明らかにされた。すなわち、日影規制その他の関係法規の制約によって、増築面積は135m²程度にすぎないが、それでも許可申請、関係住民に対する説明会が必要であり、現建物を取り壊してその跡地に新棟を建てるにしても、建築当時とは法規も変わって、大幅な規制を受けるので得策ではないとするものであった。

第5回(12月17日)では、中島紘一委員執筆の「日吉キャンパスにおける図書館サービスについて—第二作業委員会報告書」が答申原案として審議され、一部修正の上、第9回日吉問題検討委員会(12月19日)に提出された。第11回日吉問題検討委員会(昭和56年4月7日)は、第二作業委員会答申の採択を決め、現有の施設・組織には多くの問題があり、改善を図る物理的余地も少ないので、図書館を中心とした具体的な建設計画を検討する委員会の早急な発足が望ましいと考えるという塾長の提案があり、次期塾長に要望の形で申し送られることになった。第一作業委員会答申も「日吉における研究・教育システムの改革について」として提出されたが、長期計画については引き続き検討し、短期計画案については、日吉主任

会議ならびに一般教育委員会を開催して、それぞれの付帯意見を付け加えた上で、次期塾長に申し送られることになった。任務を終えた日吉問題検討委員会及び作業委員会は解散した。

第二作業委員会答申は、以後に展開する日吉図書館新館建設にかかわる委員会にとって、討議の出発点・指針となったものである。学習図書館機能にとどまらず、可能であれば研空室図書も同一建物に収めて有機的な関係を図るものとしており、在籍学生数の15%程度の閲覧席、20年間20万冊、あるいは洋書・学術雑誌を加えて25万冊を学習図書館の適正収蔵能力と考え、閲覧サービスには、開架閲覧室・自習室・グループ討議室・図書以外のメディアを利用できる設備など、バラエティを持たせる必要を強調し、自然科学系(数学・化学・物理・生物・心理)・音楽・美術等の研究室に分散配置されている資料をスモール・ライブラリとしてとらえ、保存書庫・他地区図書館との連携の必要を指摘し、抜本的解決の第一歩は、新図書館建設であると断言したのである。

2. 日吉研究室増設作業委員会

人文・社会科学、語学部門の専任教員のための研究室としては、旧研(昭和39年7月竣工)と新研(昭和42年6月竣工)があり、教員研究室76、合同研究室5、談話室1から成っていたが、教員増による対応も極限に達し、緊急の対処が迫られていた。研究室整備は、日吉キャンパスの総合的な将来計画に含めるべきではあるが、結論を得るには日時を要し当面の解決とはならない。第2回日吉問題検討委員会の審議を経て、日吉研究室増設作業委員会発足の運びとなった。担当常任理事を委員長として、第1回(10月26日)、第2回(11月16日)、第3回(昭和55年2月13日)の審議をもって、新研を第5校舎方向に延長する形で増築することになり、昭和55年度予算に計上された。延床面積1064.1m²で、教員研究室33、合同研究室3、会議室1、タイプ室3から成り、昭和55年4月着工、56年3月に竣工した。

昭和56年4月には日吉情報センターに事務嘱託1名の増員があり、英・独・仏語各合同研究室配置の図書資料に関する業務を担当して、教員サービスの改善が図られた。昭和40年4月に改正施行の現行日吉研究室規程及び運営委員会規程は、増築を機会に再検討され、昭和56年12月18日改正された。日吉情報センターとの関係について触れることのなかった規程に、相互の関連が初めて明らかにされた。すなわち、研究室図書資料に関する業務について、選定は各部門・部会等が行い、収集（受入・注文業務等）・整理・提供・情報サービス等は、日吉情報センターが行うと定められた。重要事項に関し、必要に応じ日吉主任及び日吉情報センター所長の運営委員会出席を求めることができることになり、図書資料の利用範囲が本塾専任教職員に広がられた。

研究室増築は、日吉図書館新館の建設問題と直接の関係にあるものではないが、情報センターが研究室図書資料に関する業務を担当し、新館に研究室図書室機能を包含する以上、相互の関連の明確化を避けて、ソフト部分の円滑な運用を考えることはできないのであり、研究室増築は、新館建設計画を容易にしたものといえる。

3. 日吉図書館建設調査委員会

昭和56年5月再任された塾長は、研究と教育の発展充実を図る条件整備の一つとして、日吉地区における図書館サービス、特に学生に対するサービスを改善・発展させるために新図書館の建設を決定した。11月に至り、日吉図書館建設調査委員会を発足させ、125年記念事業への体制作りを進める第一歩とした。委員会は、担当常任理事を議長とし、各学部長、日吉主任、各部門代表4、三田教員代表2、日吉研究室運営委員長、研究室主事、日吉情報センター所長、副所長、研究・教育情報センター所長、本部事務室長、日吉事務長、施設部長、学生部長及び事務局で構成された。

第1回委員会は昭和56年11月25日に開催され、①新図書館は学習図書館機能を中心とする施設で

あり、②在籍学生の15%、1500の閲覧席及び年間増1万冊の約20年分、20～25万冊を収容する、③現藤山記念日吉図書館は、新館建設後も図書館機能を果たす保存書庫として活用するという日吉問題検討委員会の答申内容を踏まえた上で、①新図書館の性格・機能、②規模、③建設場所に関する基本構想の検討を諮問された。しかし、日吉情報センターにおける研究者サービスは、施設上の制約もあって問題のあることは明らかであり、日吉研究室及び各部門会の意向を十分に配慮して、必要あれば新棟建設に研究者サービスの施設を加えるという軌道修正が行われた。また、新棟建設及び藤山記念日吉図書館の施設利用については、今後の日吉キャンパスの土地・施設利用を展望して審議することを確認した。

第2回（12月10日）には、渋川雅俊委員を中心とする情報センター側委員の作成した「日吉図書館新棟計画の構想(案)」において、学習図書館を中心とするA案6457m²、研究室図書をも収容するB案8093m²が具体案として示された。これに対し、新棟は学習図書館機能を中心とはするが、研究室図書（人文・社会科学、語学関係）をも収容するため、B案の規模（収蔵40万冊、閲覧1500席）が望ましく、現日吉事務棟設置場所を建設場所に選んだ。研究者へのサービス改善には図書館と研究棟との隣接が不可欠であり、他の候補地である食堂棟前の緑地帯は学園環境上の聖域で、これを破壊することはできないとしたからである。

B案採用となれば、床面積の増大による建設費の増額はいうまでもなく、日吉事務棟、学生部棟の取り壊し・再建費等建設資金の裏付けが必要である。構想B案を生かしながら規模を縮小して、学生用基本図書を15万冊、閲覧席の算定基盤を学生定員に換え、研究者用を含めて1400席とするC案を準備する必要にも迫られた。機能上異質の図書館と事務棟を併設するか個別とするか、アカデミズムの象徴としての美観とアプローチの問題、キャンパスの土地利用の将来計画とのかかわりあい、事務新棟の規模の見積り等、理事者の下で鋭

意検討が続けられた。

事務棟施設を図書館棟に含めて建設するのであれば、予算制約の下でも可能であると判断した担当理事は、第3回(昭和57年1月14日)を召集し、次の結論を取りまとめて委員会答申とし、解散した。

1. 図書館新棟の建設に当っては、現在のサービスを向上・発展させるために、機能的な面を重視して施設の改善を図るだけでなく、それが日吉キャンパスにおける教育と研究のあり方を象徴する建造物とするためにも、外観や配置などに十分留意すべきである。
2. 新棟の性格、規模、建設地については次のようにするのが望ましい。
 - ① 新棟における図書館サービスは、学習図書館機能を基本とするが、研究室蔵書の保管を中心に、教員に対するサービスも十分に行えるようにする。
 - ② 建設規模は、日吉地区在籍者数のおよそ15%を収容し、約40万冊の蔵書を収容できる施設を中心に考える。
 - ③ 建設地は、教員へのサービスを一層改善できるよう研究室と隣接させるため、現在、事務棟が置かれている場所とする。なお、建設地を同地によって、現事務棟の再建問題が派生するが、事務棟施設を図書館棟に含めて建設する場合には、図書館機能を損なわないよう十分に配慮する。
 - ④ 新棟建設後の藤山記念日吉図書館施設利用については、同施設に日吉地区の保存書庫を含める。

但し書き——②建設面積については、上記第2項の要件を達するよう極力努力するが、予算制約や建設費の上昇などの要因で、若干の手直しが必要となることがあり得ることを原則的に了解する。④藤山記念日吉図書館施設利用については、委員会で審議された方向で検討されるべきと考えるので、この件については別に検討するものとし、その扱いにつ

いては理事者に一任する。

4. 日吉図書館(新館)建設委員会

昭和57年2月に入ると、新館の設計監理は、楨総合計画事務所が当ることに決まった。日吉事務棟・学生相談室の所要面積について急ピッチで詰めが行われ、約1010m²であることが明らかになるに伴い、建築費の制約から、図書館部分についてはB案を330m²程度削減するよう指示があり、発足予定の建設委員会の審議に必要な基本計画案図面の作成を楨事務所に依頼し、併せて125年記念事業の募金趣意書作成にも必要なため、基礎データを至急提出せよと下命された。支部センター所長の交代期に当たり、所長の意向を伺うことができないまま、たたき台にすぎないので私案でかまわないとの教示を得て、3月25日、理事者立ち会いの下に楨総合計画事務所に手渡すことができた。

必要延床面積は7789.5m²、B案を303.5m²削減したものとなり、収蔵40万冊(基本図書コレクション20万冊、1317.8m²、研究用図書20万冊、1122.2m²)、閲覧席1440(学生1390席、2780m²、研究者50席、150m²)、事務スペース40名、400m²、共通スペース2019.5m²を内訳とした。このほか、新棟における学習図書館機能・研究図書館機能・保存図書館機能のそれぞれの運営方針、個条書きにした建設上の基本方針、及び閲覧・書庫・事務の各スペースごとに、主要施設とその機能、望ましい配置場所、規模等を記述したプログラムをもって日吉図書館新棟必要面積私案とした。

6月15日、平面図としての基本計画原案が初めて示されたが、柱間隔7.25m×7.25mと7.25m×8.1mの2案があり、地下1階地上6階、延床面積9173m²(1250席、書架1213複式連)であった。本塾側の意見を伝えて修正を依頼し、6月25日、第1次基本計画案が出来上がったので、担当常任理事者名で委嘱ずみの日吉図書館(新館)建設委員及び日吉事務棟建設委員の合同による第1回委員会(6月29日)が開催された。建設委員会は、担当常任理事の下に、各学部長、日吉主任、

各部門主査4，部門代表4，日吉研究室運営委員長，日吉情報センター所長，副所長，研究・教育情報センター所長，本部事務室長，三田教員代表4，施設部長，計画課長及び事務局で構成された。

第1回委員会に提出された基本計画案は，地下1階地上6階，延床面積9147m²，1375席，書架1219複式連で，地階には日吉事務室・学生相談室のほか，図書館A Vホール・視聴覚室を置くものであった。これに対し，計画案は全体的に余裕がなく，長期の展望に立つ大胆な計画が必要であるという批判もあったが，予算枠の許す範囲内で検討するほかなく，小委員会を発足させて基本計画の検討を進めることになった。各学部長，日吉主任5及び研究・教育情報センター所長を除く委員をもって小委員会を編成した。

第1，2回小委員会（7月8日，20日）は，三田新館建設計画の経緯及び建物についての利用者と職員の評価・問題点の説明があり，これを踏まえて計画を進めて行くことが確認された。新図書館の基本的なあり方を審議して，研究用図書の利用が問題となり，研究室運営委員会で前向きに検討することになった。その他の指摘については日吉キャンパスの特色を生かして原案の練り直しを設計者に依頼することになった。理事者の下で提示条件の詰めが行われ，建物の高さ10m以上は日照申請を必要とし，15m以上では公開空地の提供を義務づけられていることが分り難関となったが，施設部の折衝で解決をみることができた。

第3回小委員会（10月1日）では，代替案である地上4階9111m²と地上5階9131m²を比較審議し，地上4階案を基本として，①玄関入口の無断帯出防止装置とメインカウンターの機能的連係，②1～2階の主要階段の幅員拡張，③事務スペースの拡張と環境・機能上有効な場所への設置，④研究用図書に対する学生利用の効果的なチェックポイント，⑤入館者チェックの必要等を改善することになった。学内では，地上4階案の1階修正案で事務室が北側に変更されたことに端を発し，10月8日，執務時の十分な照明と端境期の

冷暖房対策を実情に合わせて運用することを条件として，機能優先の観点から北側もやむをえないものとし，10月6日の研究室運営委員長経験者による協議では，新図書館に収める研究室資料について，学生にも開放するという基本方針が確認された。

第4回小委員会（10月27日）では，3次案9243m²，1404席，1223複式連を審議し，次の要望を取りまとめた。①図書館を大学キャンパスの象徴にふさわしい魅力あるものとし，同時に第4校舎1階への日照を良くするため，建設位置を南東方向に移動し，駐車場の縮小ないしは移転を含めて入口前広場の整備を図る。②2，3階の学生用ラウンジをグループ学習室的なものとして活用できるようにしたい。③利用者を2階に導くための階段の設置場所，形状・幅員ならびに各フロアの階段位置・数をさらに検討し，機能的なものとしたい。④3階貴重書閲覧室は，将来の発展と利用者の性格を考慮して4階に変更することが望ましい。

第5回小委員会（11月22日）には，4次案9165m²，1369席，1242複式連が提示された。①駐車場をなるべく他の場所に求め，建物両側には駐車場を設けない。②建物の位置は，第4校舎から15mの距離を置き，技術的に可能であれば，西側スペースに余裕を持たせるため，なるべく建物位置を東側に寄せる。③建物内部に関しては，1階BDSの位置，2～3階のらせん階段の位置，貴重書室の設け方など再考を求める意見が出された。

建築許可申請との絡みで，昭和57年12月10日までに建物の大きさと，建築位置を最終的に決定する必要があり，第2回建設委員会が開催された（12月9日）。地階北西部のくぼみ約234.9m²を建築工事に含め，将来の保存書庫・倉庫として利用するという提案が出され，とりあえずこの部分を含む面積で許可申請を行い，その実現性については理事者の下で検討されることになった。

第5次案9157m²，1367席，1258複式連によって第6回小委員会（昭和58年1月22日）が開催さ

れたが、地階保存書庫は検討中であり、今後の建設予算との関係で再検討もありうると念が押された。4階は学生席を3階に降ろすことにより研究者主体のフロアとし、3階事務室をここに移す、また1階の段差部分は、スロープで対応できる高さに変更することになった。以上で、小委員会の合意が得られたので、第3回建設委員会(2月8日)が召集され、地階の保存書庫予定スペースを加えた9392m²の基本計画成案が審議され、1階の段差、レファレンスカウンターの必要等が問題となったが、計画の大勢を左右するものではなく、関係者の間で詰めることになった。これによって、昭和57年6月以来9回に及ぶ建設委員会の実質審議を終わり、基本計画が承認された。

5. ワーキング・グループ

小委員会は任務を終えて解散し、実施設計に伴う詰め作業は、建設委員会の下のワーキング・グループに引き継がれることになった。グループは、担当常任理事に代わって日吉情報センター所長が主宰し、日吉主任会議、情報センター協議会、研究室運営委員会、語学視聴覚教育研究室委員会、各部門会との意見調整を十分に行いつつ、施設の有効適切な使用法を検討し、新図書館の運営に関するソフト部分を固めるのが任務である。

第1回(4月28日)には、初めて百分の一の平面・立面・断面図が示され、9358.5m²、1355席、1256複式連を審議し、騒音と窓の大きさ、2階喫煙コーナー等が話題となった。許可申請は4月15日に完了、確認申請はいつでも可能な状況にあり、9月20日予定の評議員会から逆算して6月末までに実施設計の重要部分を終わらせる予定とのことであった。第2回(5月27日)は三田の新館を見学し、日吉のイメージ作りを進めた結果、6月8日、1階南特別閲覧コーナーの段差、照明問題、入口周辺、喫煙室等に関する要望書を設計者に提出した。第3回(6月24日)は、これに対する回答の形で開かれたが、段差については、空間構成の観点に立つ設計者と機能本位に立つグループの

意見の間には、質的な隔りがあり、グループの判断を超える問題ではあるが、再度の検討を依頼した。大学(日吉)新図書館・事務棟建設工事に伴う日吉事務棟、学生部棟の仮設事務棟への移転、解体工事等が昭和58年夏季休業中に行われ、今秋には地鎮祭、着工が予定されている。今後のハード部分の推移を見守りつつ、次の段階であるソフト部分審議の準備に着手するとともに、昭和60年1月竣工予定の日程に合わせて、昭和59年度予算申請の検討に着手しなければならないところである。(昭和58年7月29日記)

付表1 新図書館の利用施設(6月24日付け図面による)

	名 称	席 数	書架複式連数	収蔵能力
B F	A V 室	80席		
1	レファレンス・コーナー	186	学習用 35 連 研究用 34.5	10,033冊 9,890
	特別閲覧コーナー	16		
	AVコーナー	20		
	新聞閲覧コーナー	24		
2	軽読書コーナー	42		
	東開架閲覧室	82	115	38,461
	グループ学習室	78		
	西開架閲覧室	214	140	46,822
	北開架室(喫煙可)	22		
F	タイプ室	3		
3	東開架閲覧室	220	203	67,892
	ギャラリー	40		
	西開架閲覧室	194	単行書用 66 製本雑誌 52	22,073 13,912
	学生カレント誌	34	9 台	342誌
4	東 書 庫	14	373.4連	124,881冊
	東キュービクル	8		
	研究者用閲覧室	30		
	西 書 庫	6	単行書用 101.1 製本雑誌 105	33,812 28,093
	西キュービクル	8		
	研究者カレント誌	16	13.5台	513誌
	貴重書閲覧室	6	12 連	4,013冊
	マイクロコーナー	4		
F	タイプ室	3		
合 計		1,350席	1,237 連 22.5台	399,882冊 855誌

		学 生 用	研 究 者 用
内	席 数	1,275 席	75 席
	書 架	単行書 611 連 雑誌架 9 台	626 連 13.5台
収蔵能力	単行書	175,248 冊	158,693 冊
	参考図書	10,033	9,890
	貴重書		4,013
	製本済雑誌	13,912	28,093
		342 誌	513 誌

設計図面との間に、席数10、書架0.5連の差あり

慶應義塾大学日吉

新図書館・事務棟設計メモ

榎 文彦

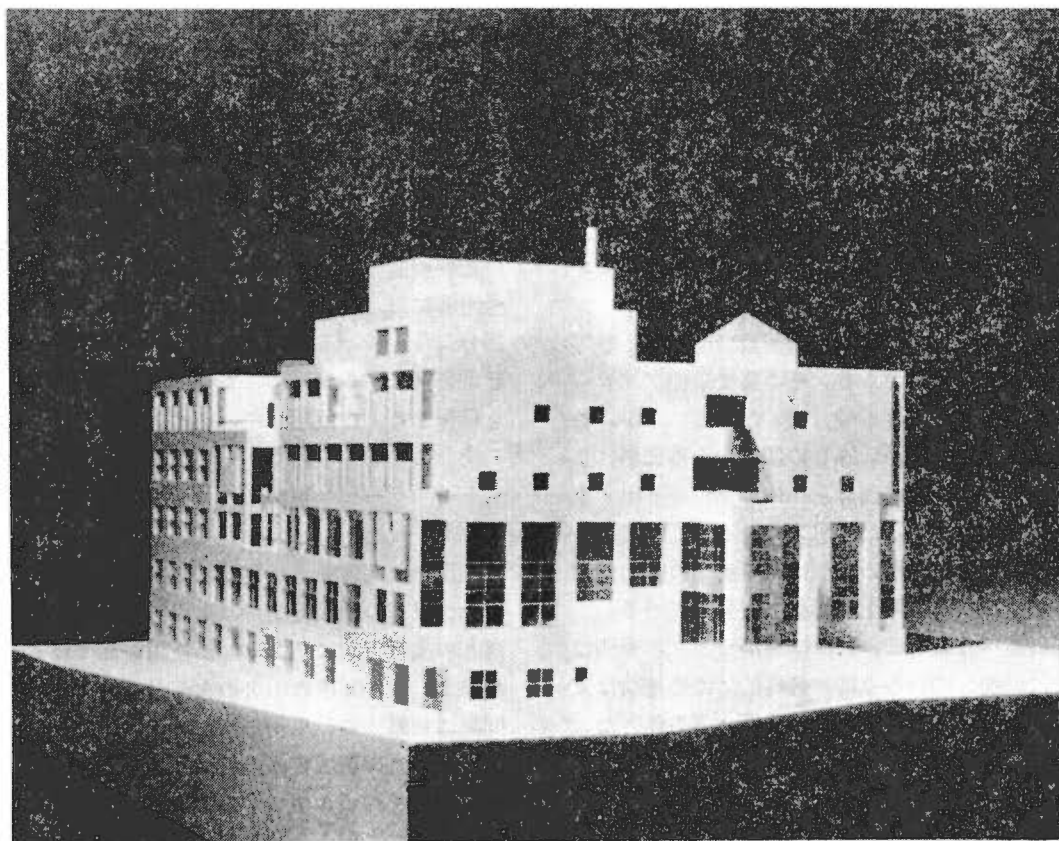
(榎総合設計事務所代表取締役)

慶應義塾大学(日吉)新図書館・事務棟(以下日吉新図書館とよぶこととする。)の設計に着手してから約一年半の時間が経過した。細い作業の詰めも略終り、今年の9月の末には着工の運びとなっている。そして昭和60年の春には開館が予定されているが、今この一年半有余の設計作業をふりかえりながら、新図書館の構想・内容等について述べてみたいと思う。又、三田の新図書館が完

成し、既に使用され始めてから一年以上たっているのので、三田の図書館と随時、比較しながら話をすすめていきたいと思う。

1. プログラム及び敷地等の条件

日吉の新図書館は現在同キャンパスにある藤山記念図書館が手狭になってきた為に、今回慶應義塾創立百二十五周年記念事業の一環としてその新築が企画されたものである。建物は地下1階、地上4階の鉄骨・鉄筋コンクリート造、総床面積9,500m²(三田の新図書館は約15,000m²、但し9,500m²のうち、会計・用度・工務等関係の事務棟部分約1,000m²を含む)であり、三田新図書館の約2/3である。そして40万冊の蔵書能力は三田の110



東側(記念館側)から見た新図書館

万冊の1/3強であるが、これは三田に較べて書架が殆ど全部が開架方式であるのと、後に述べるように学習図書館として座席数が1,400席と三田の1,100席に較べて圧倒的に多いからである。

敷地は日吉のキャンパスの正面入口に向って、中央並木道の西南隅にあり、東横線日吉駅を見下すところにある。北側には第四校舎群、研究室棟がせまっているが、東側は並木道に沿って東へ緩い上り勾配をもった広場に開いている。又敷地の南側は銀杏・針葉樹林の常緑樹の並木を介して中央ブルヴァードに面している。敷地の東端を形成する並木道からの側道が最も職員・学生の流れが大きいことから、又この部分がキャンパスの中心部に最も近いことから、主なる出入口は建物の東面に設けられる事が適当であることは当初から予想されていた。当敷地は可成余裕があるとはいうものの、更に周辺に十分な空地、或いは広場をとろうとの考慮から、地上6階案、5階案が当初検討されたが、建設委員会、情報センターとの数々の協議を経て、最終の地上4階案に落ち着いた。その理由として、内部機能としてなるべくフロア当りの面積を大きくする方が、オペレーション上好い事、階数を減らす事によって、利用者のエレベーターへの依存度を減少する事が出来る事、コア部分を除くネットの有効面積が増大する事等が評価された結果である。その為に東側アプローチの側道からのひきが幾分狭くなっているが、これは玄関附近を柔かい感じの傾斜のある広場にして、側道の東側の庭部分と一体感をつくり出す事である程度解決し得たと思っている。尚、階数を少くした事は、敷地の北側にある第4校舎の南面する教室群への日照上の影響も緩和している。

先に述べたように、西には崖がせまり、南側は並木に近接している点に、最終的にこの建物は東西に約56.7m、南北に34mの簡明な直方体となった。又建物の高さは4階までで約18.3mであるが、この地域は風致地区であることから屋上階の大きさ、あり方についても、あまり突出したものではないようにとの指導を受けている。

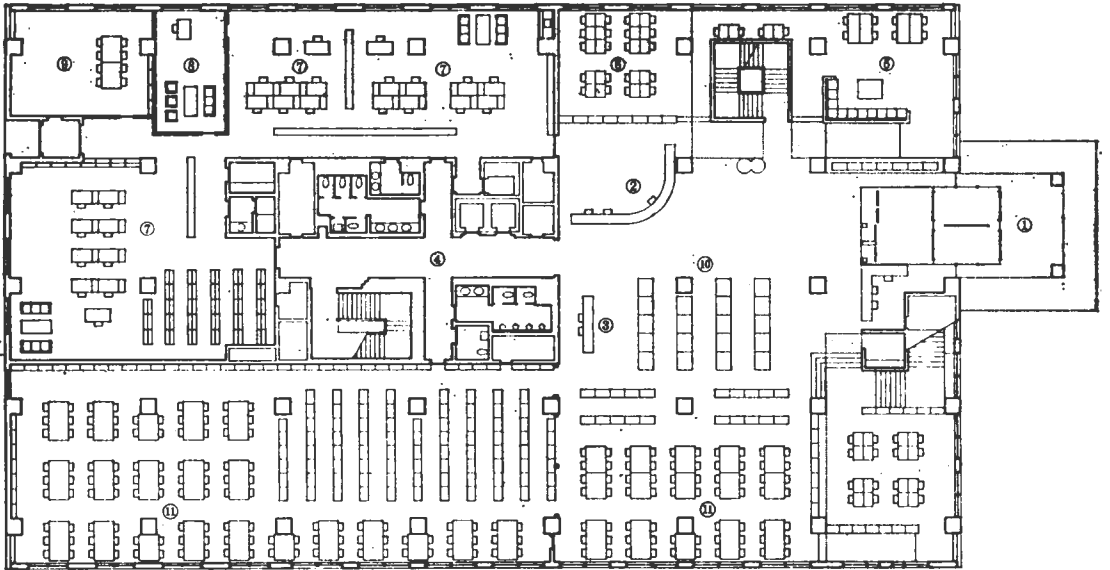
2. 各階の平面構成

a. 1階

1階には東側に風除室を介してエントランスが設けられ、三田と同様にブック・ディテクターがその正面に設置されている。その奥に柱3スパン程入ったところにコア部分があり、その進行方向右手がメインカウンター、左手がレファレンスカウンターである。エレベーターホールは各階共通で、この中に一般用エレベーター2基、管理用1基、主要直通階段、便所、ダクト・スペース等が収められている。もう一つの直通階段はエントランスを入れてすぐ右手北側にあり、地下のAVホールへのアプローチはこの階段を使う事になる。その階段室によって分けられる形で、東北端3スパンに新聞閲覧コーナーとAVコーナーが設けられると同時に、幾分床があげられ、領域性が与えられている。尚、エントランスと新聞コーナーの間には展示棚が設けられる予定である。そしてメインカウンターの背後はこの図書館の管理の中心である閲覧事務室、選書室、管理事務室、所長室等がコンパクトに収められている。三田と同様に建物の南半分は目録コーナーを介して図書館の重要機能の一つであるレファレンスコーナーが全南面に沿って配置され、又その東端は特別閲覧部分になっている。レファレンスコーナーの書架を低書架にする事によって全体の視覚的な見通しを確保するよう留意している。

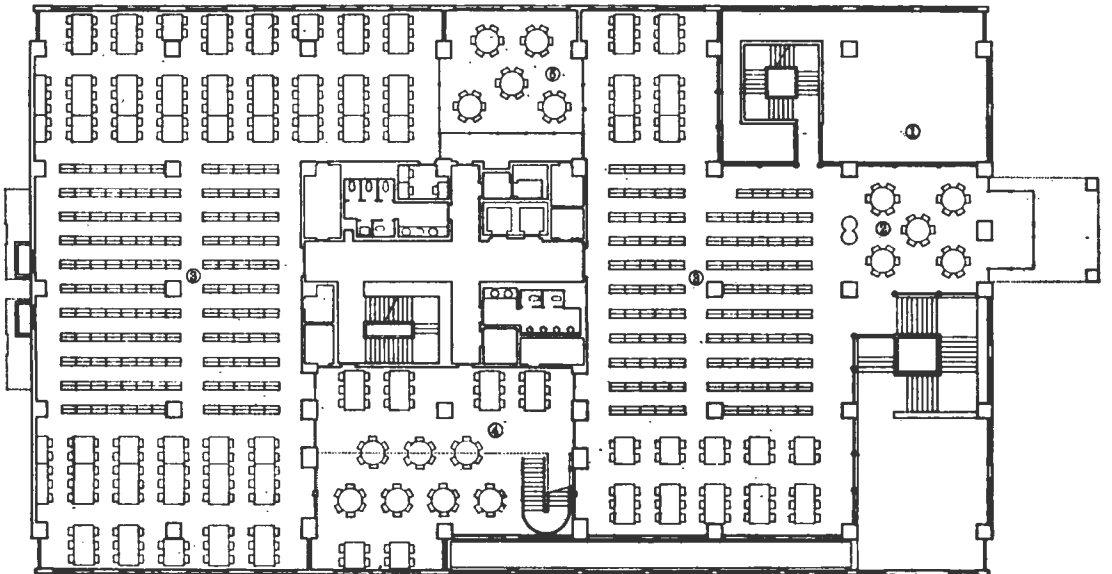
尚、この階の事務スペースが面する西端には、もう一つサービス用の小エントランスが設けられている。

三田の新図書館では柱間は8.1m×8.1mであったが日吉の新図書館では東西方向は同じ8.1m、南北の奥行方向に7,250mが使用されている。これは2,3,4階の中央の大部分を占める書架の間隔に対処する結果得られたディメンションである。今回この新図書館の特徴として、南北面において壁面を柱から少しずらす事によって、後に述べるように表層の表情の変化をうる様考慮されている。



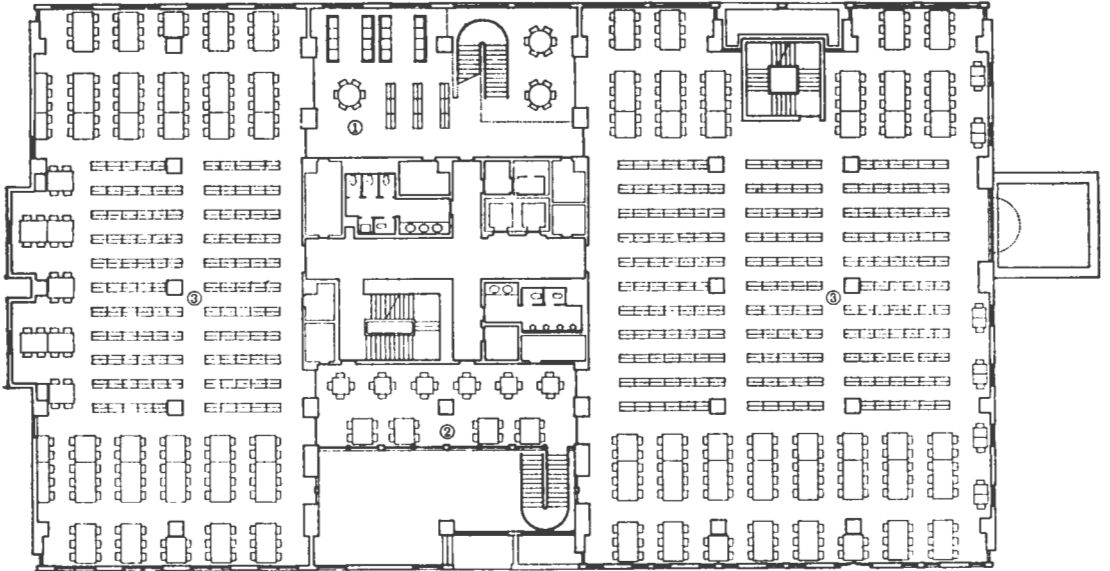
- | | | |
|--------------|---------------|----------------|
| ① エントランス・ポーチ | ② メイン・カウンター | ③ レファレンス・カウンター |
| ④ エレベーター・ホール | ⑤ 新聞閲覧コーナー | ⑥ AVコーナー |
| ⑦ 事務室 | ⑧ 所長室 | ⑨ 選書室 |
| ⑩ 目録コーナー | ⑪ レファレンス・コーナー | |

1階 平面図



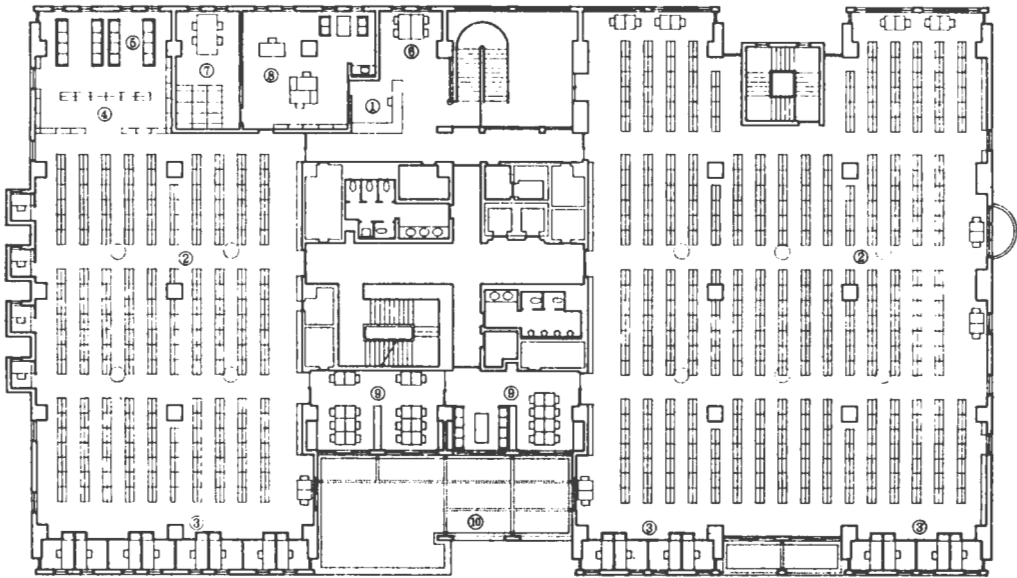
- | | | |
|-----------|-----------|---------|
| ① 吹抜 | ② 教養書コーナー | ③ 開架閲覧室 |
| ④ グループ学習室 | ⑤ 特別閲覧室 | |

2階 平面図



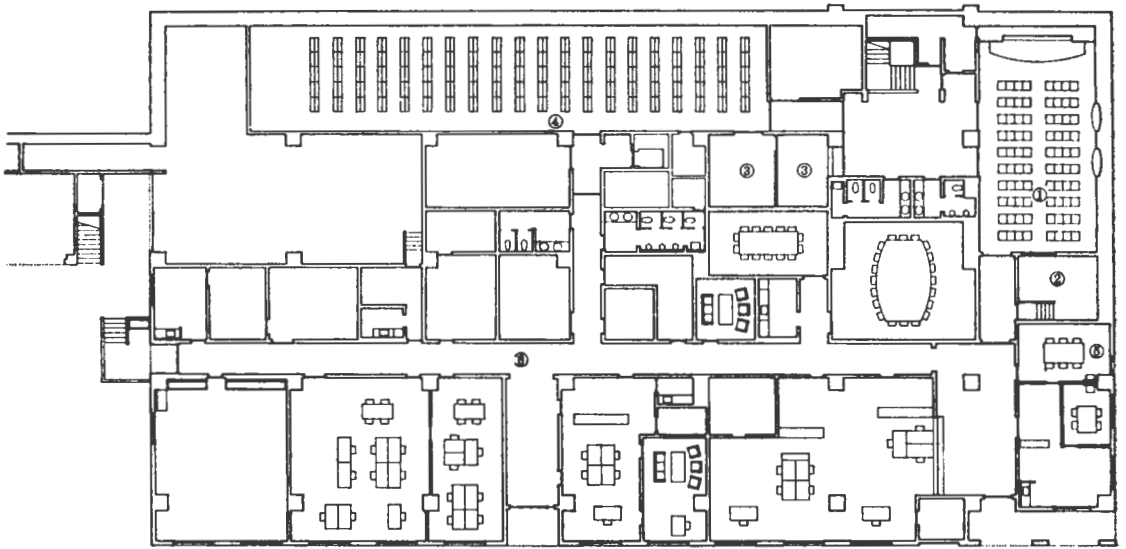
- ① 学生カレント誌コーナー ② ギャラリー ③ 開架閲覧室

3 階 平 面 図



- ① 受付カウンター ② 書庫 ③ キュービクル ④ 研究者用カレント誌コーナー
 ⑤ ラウンジ ⑥ マイクロ・コーナー ⑦ 貴重書閲覧室 ⑧ 事務室
 ⑨ 研究者用閲覧室 ⑩ テラス

4 階 平 面 図



- | | | |
|--------|---------|---------|
| ① AV室 | ② 装置室 | ③ 情報処理室 |
| ④ 保存書庫 | ⑤ 学生相談室 | ⑥ 日吉事務室 |

地 階 平 面 図

b. 2, 3階

1階のエントランスの直ぐ左手の吹抜けを介してゆっくりしたオープンの階段が2階に利用者を導く。又北側の階段室は閉じた塔としてデザインされもう一つの吹抜けスペースに直立している。そしてこの附近が新図書館でも空間的に最も表情の豊かな部分を形成している。玄関アプローチの丁度上部にあたる場所にガラスの突出部が設けられ、ここがインフォーマルな読書コーナーになっている。3階も同様であるが、中央の2スパンは主として開架式書架が設置され、その南側及び北側が閲覧スペースになっている。この階では南側読書スペースの中央がグループ学習室としてガラス面で区画され、吹抜けを介して3階への直通階段があり、ギャラリーに通じている。

尚、喫煙が許される特別読書室が北側の中央部にある。3階も、2階と略同じような平面構成で異なるところは北側に学生用カレント誌コーナーがある吹抜け空間によって4階に通じていること

と、グループ学習室の上部が、ギャラリー風の読書コーナーになっている事であろう。

c. 4階

4階は、平面を見ても判るように、その大部分が開架書架である。この階は、一部北側は一般学生にも北側の吹抜け部分の階段から開放されているが、他の大部分は研究者用に供される。その為に南側外壁面に沿ってキュービクルが設けられ、又研究者用カレント誌コーナー、ラウンジマイクロコーナー、貴重書閲覧室及びそれを管理する事務室が北側におさめられている。尚、南側のコアの前のあたるところは、研究者用の特別閲覧室があり、ここから屋上テラスへ出られるようになっている。

d. 地下1階

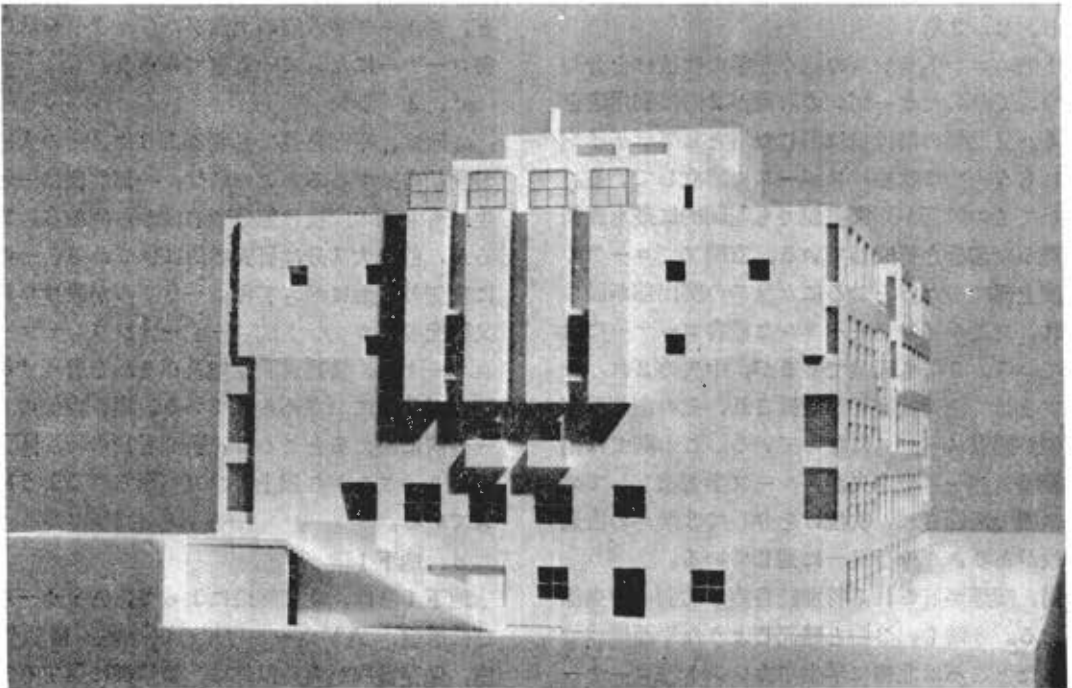
地下1階は、北側階段によって、AVホール及び装置室、AVホール専用の機械室、情報処理室、保存書庫がある以外は、事務棟に属する為、その部分の説明は略することにする。

3. 空間の連続性と領域性

以上、主として機能別空間構成を各階について述べたが、それではこうした空間構成がどのような建築的意図に基いてつくられているのであろうか。最近の図書館は内部に最大のフレキシビリティを要求するとともに、管理の効率を高める為に、どちらかという均質な空間を求める事になる。例えばオフィスビル、ショッピング・センターと較べても極めて類似な性格の空間になり勝ちである。三田の新図書館の時もそうであったが、この様なフレキシビリティを満足させながら、同時に如何に内部の各部分に豊かな領域性を与えるかは、我々にとって日吉の場合も、同様に重要な設計上の課題であった。しかもこの新図書館は学習図書館の性格が強い為、空間の大部分は開架書架と、それをとりにくく閲覧室の二つによって構成されている。従って我々の課題は各階毎に、如何に管理上の効率を犠牲にすることなく、又利用

者にとって混乱をきたさない形で均質な空間を分節化し、夫々にアイデンティティを与えるかということであった。

例えばレファレンスコーナーは低い書架を中心にコーナー全体が一望に見渡せる。東西に建物の全長が見通せるところはここだけである。そして南の窓越しに豊かな緑が目に入ってくるであろう。ここでは水平方向の広がりかメインテーマである一方、エントランスの両側に2階分の吹抜けを設ける事によって、この建物に入って来るものに縦方向の広がりを与えるとともに、ここから東にキャンパスの眺望が充分に享受出来る様に考えた。AV・新聞閲覧コーナーは、先に述べたように床が一寸上っている事で領域性を獲得している。ここは北面の外壁にガラスブロックを用いて、外への眺望は限定しているが、北の安定した光を充分にとり入れ落ち着いた空間にすべく意図されている。



西側（日吉駅側）から見た新図書館

2階、3階の閲覧室にも出来る限り領域性を作り出す為に、外壁にそって、テラスをとったり、アルコーブをとったり或いは窓の形状に工夫が試みられている。3階、4階の西側では外壁を突出させ、読書コーナーを設けている。或いは同じ3階の南側の読書スペースをとってみると、西側の2スパンは普通の窓であるのに対し、東側の3スパンは凹状の開口をもっている。読書する人々が方位、眺望窓のかたちを通して一寸した場所のアイデンティティに基く選択の可能性が与えることが考えられている。4階はその大部分が書架に充てられているが、トップライトによって通路部分に自然光をとり入れていると共に、東西の外壁部分にも特徴のある形状をもったデザインがなされている。更に細かく内装の仕上、照明の方法或いは家具等によって、我々は空間のアイデンティティを高めるべく、次の段階の現場におけるデザインにおいて努力したいと思っている。

このように目的空間である、読書コーナー、書架空間に変化をもたせると共に、我々は夫々の目的空間に到達するまでの空間経験を重視した。そうした空間経験の性格づけの原則を確立する為に、日吉の新図書館の場合、アプローチ、流れの空間に“旅”というテーマを設定した。つまり読書する、研究するという事は言うなれば、思索の旅である。旅を豊かにする為には、その重要構成要素である、導線部分の意匠を豊かにすることではなければならない。普通の教室棟やオフィスと異なって、新図書館の場合、縦方向の流れを導いていく階段、及び階段室の意匠はその意味で重要であり、横の動きに関しては、どのように机と机の間、或いは書架間に様々な性格づけが行えるかが重要なテーマになる。

この意味で、エントランスの北側の階段室は四角く閉じたコンクリート打放しであり、その突端はガラスの屋根になっていて、上から自然光が入ってくる。茲ではまさに塔の上下という概念にこの部分の流れの象徴性が求められている。一方、玄関のすぐ南側の階段は大きな吹抜けの中でゆっ

くりと周辺の眺望を楽しみ乍ら上り下りする丘の散策路的にデザインが考えられている。一方、中央のコア部分は、それ自体性格ある空間として通路部分が十字路にデザインされている。そしてこの十字路としての性格を更に強める為に、天井は薄いヴォールトになっていて、十字路の中央で二つのヴォールトが交錯し、その中心性が演出されている。恐らくこの部分は壁仕上、照明等も他の部分と違って明るく配色された特徴のあるものになるであろう。そして十字路の突当りのドアは防災関係の規則が許す限り、透明なものとして、周辺の空間への連続性を高めたいと思っている。従って、この部分のドアのデザインもそのディテールが重要になってくる。

そして2階に到達したものが満席の為、かりに読書スペースを見出せない時、なるべく自然に3階にいけるよう、2階の南側にある吹抜け部分に設けられたU字状のオープンの階段は、ガラスのパーティションを通して容易にその位置を確認することが出来る。又3階から4階へのつながりも吹抜けとU字状の階段という同じセットピースによって視覚的、空間的に処理されている。我々にとって、この様に各階のつながりを単にクローズされた階段やエレベーターだけにたよることなく、視覚的にオープンに繋げていく事は旅という経験としての建策を豊かにする為に、必要な操作であった。緩かに螺旋状に吹抜け空間を介して視覚的に繋げていく空間が連続性を与えるとともに木の枝葉の用に到達した目的空間に夫々アイデンティティを増す為に、今後細心のディテール・デザインの裏づけが必要となってくる。

三田の新図書館と異って、学習図書館であるこの建物は予算的にも可成厳しいものになっている。その為にディテール、或いは家具のデザインは可成素朴なものとなるであろう。又色彩計画に関しては若い青年が利用者の大多数を占めるこの図書館では、恐らく白・グレイをバックグラウンドの基調色としながら随所に鮮かな色彩をほどこしたいと思っている。

4. 建物の外観について

最初にのべたようにこの日吉のキャンパスは昭和の始めに建設され、その歴史は三田の丘に較べて新しい。その日吉のキャンパスにふさわしく、現在という時代にかかわりあい、同時に図書館という機能をどのように表現していくかは、興味あるテーマであるが同時に簡単な事ではない。

我々が建物の表現のベースに選んだ一つのテーマに“樹木”がある。先に内部の空間構成のところで述べた“旅”と同じように“樹木”とは必ずしもそのまま直喩としてその様に建物を表現したり、或いは空間をつくろうという事ではない。寧ろ、“樹木”或いは“旅”という言葉が与える、“感性”の世界をその表層或いは空間構成の手がかりにしていこうという事であろう。勿論“旅”が読書における“思索の旅”に因縁してとらえられているように“樹木”も周辺の木立の豊かな環境に無関係ではない。この敷地の中で最も卓越した環境条件は新図書館の南側にある並木である。そして地上4階のこの建物は、その並木越しに上層部を遠眺する事が出来るであろう。この場合我々が“樹木”を通じて得る感性の世界は、樹木のような陰影とスケールをもった表層である。先づ南側のエレベーションを例にとってみよう。この部分は、一つの柱間をとってみると、地下1階から4階に移るに従って次第に窓の間の壁幅が減少し、或いは枝分れし、上昇感を与えるべく構成されている。と同時にその東側半分と西半分では、西側は壁量が多く微妙なリズムの差異を構成している。そして中央部分はテラス、或いはルーフガーデンによって一層変化のある奥行のある表情が読みとれるであろう。これ等はともすれば均質空間にあり勝ちな表層の均質性を打破る試みであるとともに、並木越しに見える建物の表情に豊かさを与える試みでもある。

同様に西側では、自然光を上から導入する四つの角柱と大きな壁面の構成が、書庫＝くらのイメージの演出に参加している。そして北側は、第4校舎に向いあう関係上、ガラスブロックによる半

透明な表情が他の面と違って特徴となる。

建物全体としては白とグレイを基調とするこのキャンパスの建物群と同じ様に、恐らく明るいグレイのタイルと一部打放しコンクリートがその主なる外装構成要素となる。そしてそこにステンレススチールの手すり、化粧的な壁面処理等がエレベーションにアクセントを与えることになるであろう。

全体としては、このように四角い直方体の中にも表情と陰影に富んだ表層の構成が意図されている。

以上、今回の日吉新図書館の設計要旨について概略をのべさせて載いたが、今後現場の作業を通じて、このような意図を更に明確にするとともに百二十五周年記念事業にふさわしい、使いやすく、同時に豊かなスペースを創り出す為に、更に細かいデザインに気をくばっていきたいと思っている。そして、この段階まで、設計を詰めていく段階にあたって、大学本部、建設委員会、そして情報センターの関係者の数々の貴重な御意見とサヂッションがあって始めて、ここまでまとめられた事に、特に謝意をこの機会にのべさせて載きたいと思う。

何回も繰返してのべるように三田の図書館が、より重厚なデザインによる歴史的なキャンパスの中の建物としての雰囲気づくりを意図したとすれば、日吉では未来への旅を暗示する明るいデザインを試みている。しかし三田の新図書館が出来た後、ある教授が述べられたことの一つに、夜耽々と窓からあかりの洩れる図書館は学問の森の中心的存在として、そこに学ぶものにとって精神的な励みを与えてくれるというコメントがあった。この日吉の新図書館も大きな開口からの三田の図書館と同様に、このキャンパスライフの象徴の一つになることを期待している。

日吉新図書館におけるサービスの概要

小川 治之

(日吉情報センター
パブリック・サービス課長)

はじめに

昭和60年4月の開館を目指す、新しい日吉情報センターは、地階を大学事務部門との共有としながらも、地上4階分を中心に、建坪約8,000m²、閲覧座席数約1,300、蔵書収容能力約40万冊と、単に現在の藤山記念図書館の面目を一新させるものに留まらず、おそらくは中規模図書館として、我が国を代表するものとなる。しかしながら、我々が真に利用者に問わんとするものは、建物にふさわしい図書館サービスそのものであり、実施設計も完了した現在、一層その思いを新たにその準備に追われている。ここでは、これまでに建設委員会、あるいはスタッフの間で論議されてきた新図書館におけるハード・ソフトに渡るサービスの基本的な構想について述べてみたい。同時にこれらの多くは、その効果を一層高めるべく、既に設計者の手によって設計図の上に良く表わされている。

I. 日吉新図書館の役割

日吉キャンパスの研究・教育活動を側面から支える日吉情報センターは、約350人の教職員、全学部の一般教育課程の学生約1万1千人をサービス対象とする。この対象者に従来との相違はない。しかしながら現在では、学習図書館としての藤山記念図書館と、別棟の研究室とに利用者、職員とも二分されており、ひいき目に見ても十分なサービスが行き届いているとは言い難い。こうしたことからこの度の新図書館建設の意義は、まず、両者が1つの建物に収容されることが第一である。ここに初めて日吉キャンパスとしての総合図書館機能が生まれることが期待されるからである。

大学図書館はその性格上、大なり小なり学生のための学習図書館機能と、研究者のための研究図書館機能を持っている。しかし、過酷な受験戦争を乗り切ったばかりの学生に対して、大学生としての基礎学力と一般教養とを身につける場としての日吉キャンパスの役割りは、三田を始めとする塾内他キャンパスとは別の意味で大変重要である。この点は、新図書館建設計画の当初に確認され、その後の計画を練る上で、塾内センター及び専用の学習図書館を持たない我が国の大学図書館において、しばしば論議される研究図書館機能との境界について、はっきりと運営上の方針を持たらすこととなった。即ち、新図書館においては、研究・学習の両機能の蔵書・閲覧施設を中心に、相互補完をしながらも、基本的にフロアによって分離させたことである。具体的には、メインフロアを貸出、レファレンスを中心に共有し、2～3階を学習用、最上階の4階を現在の第4校舎の語学・人文・社会科学系を中心とした研究用とし、それぞれ目的に応じた施設と共に配することとした。この結果、学習図書館機能を中心としながらも、学生のためには明るい解放された施設が、また教員には落ち着いた静かな施設を、それぞれに用意することができたと思っている。

もとより、こうした配し方は機能上のものであり、和書を中心に2～3階に配した20万冊の学習用コレクションは、職員を含めて、研究者にとっても専門以外の幅広い知識を提供するであろうし、他の施設も同様であろう。一方、こうした程度にあき足らぬ学生にとっては、研究用フロアのコレクションと雰囲気は、新たな別の刺激を与えるであろう。こうしたそれぞれの持つ機能を十分に利用し、目的に応じたより効果的なサービスを提供できるよう、今後のソフトウェア作りを進めたいし、このサービス・ソフトこそが新図書館の特色なのである。

以降、基本的な構想が比較的整理されている学習図書館機能を中心に、新図書館において予定されているサービスの概要について、関連施設とと

にも紹介してゆきたい。

II. 学習図書館としての新図書館

学部課程の学生の為には、専用のコレクションとサービスが必要であるとした考え方は、米国の主要大学における、Undergraduate Library運営の基本として知られるところである。特に戦後の大学院課程の急増により、質的にも量的にも巨大化していった米国大学図書館は、その中の限られたコレクションを必要とする学部学生にとって、大変利用しにくいものとなっていった。こうして現在では20館を越す独立した専用の図書館を、多くの場合同一キャンパス内の、しかも数百万の蔵書を誇る総合図書館に隣接させている。こうした考え方は、我が国にも早くから紹介され、リザーブ・ブック制度などその一部の考え方は導入されたが、組織的に取り組むまでには至らなかった。

一般教育課程の学生を主たる利用者とする日吉情報センターは、その性格上、又、施設の制約上この学習図書館機能に重点を置いた、我が国でもあまり例を見ない図書館となろう。そしてここでは、その機能を展開する上での基本的な方針として、次のように考えている。

- i. 蔵書は全て開架書架に収める。
- ii. 蔵書は、基本的には保存機能を持たず、その内容については、各主題の入門書・概説書を中心に、教養書を含めたバラエティーに富んだものであり、同時に、図書以外のメディアにも重点をおく。
- iii. 各施設は、快適な心安まる雰囲気と、利用目的に応じた多様な閲覧施設を提供する。
- iv. 各サービスは、できる限り簡単であること。
- v. 学生が図書館利用の基本的な理解と技術を修得し、専門課程におけるより高度なサービスを受けられるよう指導すること。

1. 全館開架書架の採用

研究用を含め、新図書館の図書・雑誌約40万冊

は、全て開架書架に収められ、利用者が直接資料を手に行けることを基本としている。特に利用の激しい学習用フロアの書架間隔は、不十分ながらも可能な限り広く確保した。しかしながら、現在でも機械化による手続きの簡略化により、それまでの40%近くの利用率が上昇し、書架管理に膨大な労力を必要とするようになった。新図書館では三田の例からも、現在の倍の利用が考えられるため、書架係等人的な面とともに、書架自体の工夫を含めた対応が必要となろう。

2. コレクション

学習図書館にとっては、適切なコレクションを維持すること自体、サービス上の大きな特色となる。その基本的な方針は、学部課程の、とりわけ教養課程の学生にとって必要とされる図書は、精選された限られたものであり、いたずらに量を誇ることは当たらないということである。即ち、大学図書館として一般的に求められる保存機能を持たないことであり、このためのコレクションとして20万冊が妥当であるか疑問のあるところだが、施設・予算上の制約もあり、研究用図書の利用、他キャンパスの利用など別の形で対応せざるを得ない。ともあれ、このことは同時に、活用されなくなった資料を常に除籍せねばならないと言う、かつて大学図書館が余り経験しなかったことを意味している。これは口で言う程、あるいは理想論として唱える程容易な問題ではない。今後、我々が新たに開発せねばならない最大の課題となろう。とりあえず、事務室内に蔵書再編成室を設けた所以である。

コレクションの中心はまず、大学カリキュラムに直接関係した図書、およびその複本で占められるが、同時に、学生が自からの知的好奇心を刺激し、学習意欲をそそるような、あるいは一般的に言われる教養書を提供することも、日吉の重要な役割りと考えている。更に、ベストセラー、ドキュメンタリーと言った軽い読み物を含めたバラエティーに富んだコレクションは、日吉の教職員は

無論のこと、隣接する矢上台の理工学情報センターの利用者に対する教養部門としての役割りをも果すことになろう。

一方、こうした多様な内容をより効果あるものとするためには、今まで施設の都合上なおざりにされてきたビデオ、オーディオカセット等の視聴覚資料についても、その目的に応じた形態での整備に努める必要がある。

学習図書館に対するコレクションのこうした基本的な考え方は、現在でも既に一部を実施しており、不十分な施設の中で良くその役割りを果してきたと思う。新図書館におけるこうした方針は、その実績を踏えて、更にその性格を明確にし、より拡大したもので、コレクションの内容に応じた閲覧施設と合いまって、一層の効果を上げるものと期待している。

3. 閲覧施設

学習図書館にとって、利用の目的に応じた多様な閲覧施設を提供することは、コレクションづくりと対を成す基本的なサービスであろう。新図書館では、その多くが開架書架を取り囲む形、図書と閲覧施設の一体化を基本としている。更に、基本的に学習用としてコレクションの保存機能を持たないこの図書館は、より閲覧施設に重点を置いた結果、座席数において三田を大幅にしのごうができたし、又、目的に応じた多様な施設を提供できた。以降、主要なそのいくつかを紹介したい。尚、つけられている施設名は便宜的なものである。

イ. 新聞閲覧コーナー

入館して直ぐの右手に位置し、主要日刊紙を中心に、週刊誌・娯楽誌、学生のための生活誌とも呼べるような資料を配した解放的なラウンジである。近くに新刊展示、総合利用案内を施した、入口付近の中心となろう。

ロ. 大型本コーナー

藤山図書館には現在、書架の効率的な運用のため

に、形態的に大型の図書を別置しているが、その中心は美術書・写真集と言った、読むよりはむしろ見る図書であり、利用者は、地下書庫への通路と言う最悪の環境の中で熱心に利用している。この種の図書は重量もあり、形態的にも帯出に適さないものである一方、時間をかけて、ゆったりとした気分で閲覧して欲しいものである。こうした内容を持つ図書を収容し、且つ、その利用にふさわしい閲覧施設を設けたいとしたのがこのコーナーである。現在、入館して直ぐ左手奥の一面を予定している。メインフロアの一等地であり、吹抜け天井を生かした、おそらくは機能性を重視した新図書館にあって、唯一の趣きのある場所となろう。又、多少の展示スペースとしても活用できよう。

ハ. 軽読書コーナー

新図書館における最大の特色の1つが、コレクションの構成にあることは再三述べた通りである。学習図書館としての性格を、通常の図書館的な区わけから表現するならば、大学図書館としては上限のある、同時に公共図書館的に見るならば下限のある、丁度その中間的な役割・内容を持たせたものと言えよう。即ち、大学における公共図書館機能という側面を強く有していると考えている。こうした考え方の一端を表わしたのがこのコーナーであり、学生・教職員がベストセラー、ドキュメンタリーと言った内容のもの、形態的にも文庫本など、気軽に利用できるもの、あるいは学生々活をエンジョイするために役立つもの等の軽い図書を、本体コレクションとは別に集中的に設けたのがこのコーナーである。

ニ. 雑誌コーナー

現在の藤山図書館における雑誌は余りにも展示スペースが不足しており、利用者の要望に十分に応じかねているのが実情である。新図書館においてはカレント誌約250種と現在の約2倍のスペースを確保し、且つラウンジ形式の閲覧設備を考えている。又、そのバックナンバー約14,000冊は近くの開架書架に収められるが、図書同様収容能力

に制限のあるところから、保存年限の考え方を取り入れ、これを越える要求に対しては、研究用フロアの共有や、他センターの利用という形で対処してゆくことになるろう。

ホ. グループ学習室

今まで触れてきた閲覧施設は、利用目的に多少の相違があるにせよ、基本的には個人の利用者を対象とした、静かで落ち着いた、本来の図書館が持つイメージを保つ施設である。この一方、現在の図書館施設としては、グループの利用者に対して開放し、こうした施設の中で、利用者は資料を中心とした討議・議論を通じた学習ができることを望まれている。新図書館ではこの機能をより重視し、中心となる2階及び3階のそれぞれの階に大きく設けられている。又、グループ用と言うわけではないが、多様な利用という意味では、喫煙可能な閲覧室も用意されている。

ヘ. 視聴覚関係施設

大学における視聴覚教育の重要性は改めて述べるまでもなく、特に日吉キャンパスにおいては早くから語学教育を中心とした視聴覚研究室が活動しており、塾のこうした施設の中心となっている。しかしながらこれらの資料・施設は、授業の一環としたものであり、残念ながら個人の自発的な学習の場としては提供されていないし、又、その性格上、語学主体のものである。図書館では一部同種の機能を持ちながらも、基本的には個人の学習の場として、更には図書に変る多種のメディアを利用する場として視聴覚関係の施設を用意し、且つ資料の整備に力を入れてゆきたいと思っている。一方、地階には各種視聴覚設備も施した多目的ホールを用意し、図書館の利用者教育を始めとし、小規模な講演会・研究会・鑑賞会、その他種々の催物に大いに活用されることを期待している。

いづれにせよ現段階では、こうした施設の将来にわたっての必要性を考慮し、まずは施設を準備したということであり、実際の運用に当っては、今後視聴覚研究室を始めとする関係部門との連

絡・調整が必要とされるであろうし、又、協力をお願いしたいところである。

4. 貸出サービス

今まで述べてきたことを新図書館における、コレクション・施設上でのサービスと考えるならば、これらを背景とし、職員が直接利用者と接するサービスとしては、まずこのサービスが上げられよう。日吉では既に昭和57年度より、この面を機械化し、貸出・返却の手続きは、利用券と図書のバーコード・ラベルをなぞるだけで迅速に処理されており、学習図書館として求められる手続きの簡略化に実績を上げてきた。同時にこの機械化システムにより、貸出状況の調査・予約、未返却者への督促状作成等事務機能も簡略され、更に今後は、利用状況を機械的に把握することにより、保存機能を持たない図書館としての最大の課題となる、蔵書規模の維持に大きな力を発揮することになるろう。

5. レファレンス・サービス

新図書館に向けて、目下最も重点を置いて準備を進めているものに、このサービスがあげられる。適切なレファレンス・コレクションと熟練した職員を配することがその生命線であるこのサービスは、全体のコレクションを作り上げる事と同様一朝一夕にはいかない。新たに設けられるレファレンス・デスクは、研究者も含めたレファレンス・サービスの要であり、研究・学習用を含めた約2万冊の資料を背景に、学生にはクイック・レファレンスを中心に、研究者に対しては、文献探索等書誌的サービス・文献の取寄せサービスを主体として提供することになるろう。又、同時に次に述べる、利用者に対する図書館利用の教育もここを中心に行われる予定である。

6. 利用者教育

利用者が、それぞれの目的に応じて図書館を十分に活用することができるよう、適切な手ほどき

が必要であるとする考え方は、古くから図書館界に存在していた。事実、入学時でのオリエンテーション、各種パンフレットの作成等は、これまで各大学でとられてきた方法である。教養課程の学生を主たる利用者とする日吉にとっては、とりわけ重要な機能と考えている。彼らが、まず日吉において図書館利用の基本的な理解と技術を得た後、専門課程の各キャンパスで、より高度な図書館利用、及びサービスを得られるよう、種々の新しいメディアも活用し実施することを研究中である。同時に、こうした基本的な考え方は、まず新図書館自体にもこの機能の重要性を反映させ、全館にわたり、利用し易いよう、又、この機能を発揮し易いよう設計上配慮してきたつもりであるし、更にこれから計画されるサイン計画においても十分、且つ慎重な配慮をしていきたいと思っている。

IV. 研究図書館としての新図書館

新図書館は昭和55年の日吉問題検討委員会第二作業部会の答申に揃った形で、第4校舎地下にある語学、人文・社会科学を中心とした図書を、日吉における研究用のコアコレクションとして収容するための約20万冊の書架と約90席の閲覧施設、及びこれに伴う雑誌業務を主体とした事務室を4階に配し、研究用フロアを構成する。3階までの学習図書館施設と異り、研究図書館としての静かで落ち着いた、又、眺望にも恵れた快適な施設を提供できるものと確信している。しかしながら、こうした諸施設の提供そのものが、研究者に対する新図書館建設の究極の目的ではない。ほとんど顧みることができなかった研究者に対する図書館の基本的な諸サービスを行う場として、言葉を多少変えて言うならば、日吉キャンパスの学術情報活動を進める総合図書館機能の拠点としての図書館が、初めて得られることの意義と解釈している。

日吉情報センターが今後塾内外にわたる学術情報の中心として活動するためには、こうした観点からの研究室との基本的な関係について見直すことを抜きにしては考えられない。各合同研究室、

その他の研究棟の図書施設に散在する研究用コレクションを、改めて日吉キャンパスの共有の財産として見直し、まずはその資料管理から始める必要がある。第2作業部会の答申のような整備された形への移行には未だ相当の時間と諸条件とを必要とするが、基本的には現存諸施設を情報センターのサテライトとして、研究上必要なワーキング・コレクションを整備し、より利用しやすい環境を整えたいと考えている。当然のことながらここで生ずる不急の資料の保存機能は、総合図書館の責任範囲であり、新図書館においてもこのための共有の保存書庫を不十分ながら地階に確保しているし、又、現藤山図書館の地下書庫の活用も検討されている。

上記のことを今後時間をかけて作り上げていく情報センターとしての基本的な立場とするならば、新図書館を待たずとも必要とされる、図書館の最も基本的なサービスの充実が当面の最大の課題である。その中心は、現在ほとんど成されていないレファレンスサービスであろう。新図書館に向けて基本的なツールの整備と職員の養成を漸次進めており、ようやく一部の利用者に理解を得られるようになったところである。自然科学までの広い主題を対象とするために、その全てに対して十分なサービスを提供することはできないまでも、より専門的な主題に関しては塾内の他の専門図書館への窓口の役割りを果たしたいと考えている。又、対学外にあっては、既に研究者が必要とする資料を1大学でまかなうことは不可能であるとし、学術情報の共有化が進められている今日、大学図書館相互の協力が一段と望まれている。当センターも既に昨年より神奈川県内のこうした相互協力機構に加盟しており、研究者は面倒な手続きを経ずして、加盟館のコレクションを自由に閲覧できるようになっている。こうした学術情報のネットワーク化の中での窓口としての機能も一段と重要となろうし、積極的に参加することによって利用者の便を図れよう。現在ではより実際的な国の内外からの文献取り寄せ機能に重点をおいて

いるが、遠からず国内外のデータ・ベースを利用した文献の探索業務も着手することになろう。自然科学系の研究者を含めて大いに利用していただきたいものである。スタッフの多くの経験のみがより良いサービス提供への道と考えている。

以上、研究者に対するサービスの基本的な構想に触れてきたが、最後に新図書館の主要な施設とサービスの概要を述べておく。

1. 選書室

研究用コレクションの質的維持をすることは、研究図書館機能の最も基本となるものである。このためには研究室側への選書方針・方法の再検討等の問題があるが、まずはその拠点となる施設を用意した。これを期に図書を直接手にして選書する見計り制度の確立、カタログ類の整備など選書環境の充実を図っていききたい。

2. 閲覧施設

4階の研究フロアはその性格上、大部分を書架スペースによって占められるが、その間に利用目的に応じた多様な施設を設けた。研究用としては眺望にすぐれた南側の個室形のキュービクルが基本となるが、これからの研究に一層求められるであろうグループによる利用施設として共同閲覧室を、又、前面にテラスを持ったラウンジでは研究合い間のくつろぎとコミュニケーションの場として快適な施設となろう。新図書館は場所的に現在のような研究室との一体感はいささか薄れるかも知れないが、それを補って余りある施設と機能とを用意できるものと思っている。この他に、レファレンス・コレクションは1階に集中して配したので、メインフロアにその専用施設が用意されており、従来最もサービスの欠如が指摘されていたこの面において、専任のスタッフを配した十分なサービスの展開が可能となった。

3. カレント誌コーナー

内外のカレント誌約500誌を集中して配したラ

ウンジ形式の閲覧施設である。専任のスタッフも配して、十分な資料管理と情報提供もなされる雑誌に係る中心的な役割りを果たすものである。

4. 貴重書室

現在適切な施設のないまま放置されている貴重書類をまとめて配し、適切な管理と設備を施してこの種の資料の活用を図ろうとするものである。

5. マイクロ資料コーナー

同じく適切な施設がないままに放置されているものにマイクロ資料がある。形態から見ても今後一段とその利用が求められるものであり、種々の形態の保管と複製を目的とした施設を設けた。

6. 4階事務室

新図書館では少い職員で効率の高い運営を行うために、事務室を極力メインフロアに集中させている。本来ならば各階に最低1名は配したいところである。従って全ての利用者に対するサービスはメインフロアで行うことが原則であるが、4階に最低限の事務機能を設けサービスの低下を補うこととした。この事務室は雑誌業務を主体とするが、研究用フロアの管理全般と研究用コレクションの貸出、メインフロアの諸サービスとの中継機能を持つこととなる。

おわりに

学習図書館機能を中心に新図書館において展開される諸サービスについて、その基本的な考え方と拠点となるそれぞれの施設について概観した。実施設計の完了は、我々の新図書館に対する夢を施設に託する段階の完了であり、これに一応の成果を得た現在、これらの施設を十分に使いこなしたサービスの提供に向って、具体的なシステムづくりに入らねばならない。勿論一時に全てを解決できるものではないが、新しい日吉情報センターづくりに一層の努力をする所存である。関係各位の格別のご理解とご協力をお願いするものである

本との出会い

石田 哲浩

私が、本と初めて出会ったのは、小学校に入学した時であるから、もう40年近くも昔ことになる。この時のことは、現在でも、折りに触れて想い出すほど、私の心の中に強く焼付いて忘れ難い出来事である。

昭和15年2月に生れた私は、幼年期の全んどを戦時下で過ごした。

当時、日本の大人達は、皆、いかに戦火を逃れ、かつ、食物をも手に入れて生き延びるか、必死になっていた時代であったので、今の親のように、〇歳児教育などといった心配りをするゆとりはなく、それどころか、絵本や玩具なども、戦災や疎開で満足なものはない有様であった。

私と母は、父と離れて、山梨の知人を頼って疎開をして居り、毎日、山で蠅を追い、川で沢蟹をつかまえ、のどが渴くとスカンポをかじるといった、自然を友とした生活であった。

そんなわけだから、終戦から8ヶ月後の21年4月に、疎開先の小学校に入学する時まで、本というものは、全く無縁の毎日を過ごしていた。

入学式の当日であったかどうか、記憶が定かではないが、先生から配られたのは、2枚ほどの、ガリ版刷のわら半紙であった。

最初の頁には、「サイタ サイタ サクラガ サイタ」とあり、その下には、桜の木に花が咲いて、その花びらが散っている絵が書かれていたと記憶している。

当時、敗戦によって、旧体制の全てのものが否定されて、教科書も、不適切な部分に墨を塗って使用していた。私も、その後、「お墨付き教科書」を使ったが、子供の眼にも何とも情けないものであった。おそらく、先生は新入生にみじめな想いをさせまいと、鉄筆を握ったのであろう。

私と本との出会いが、「お墨付き教科書」でなく、とても本というには程遠く、粗末ではあるが心の込めた「プリント」であったことは、まことに幸わせなことであった。

それから、2～3ヶ月後に、山梨から、父のいる東京に引きあげて来たので、このガリ版刷教科書とお付き合いは、それきりになってしまった。

東京に戻ってからも教科書の不足は相変わらずで、新しい教科書は、クラスに10冊しか配給されず、運良く抽選に当たった者以外は、上級生に譲り受けなければならなかった。

これとて、上級生が、うまく見付かって、本を持っていればの話して、実際は、そう簡単なことではなかった。

このような、教科書順送りの状態は、私が4年生頃まで続いたと記憶している。

ある時、どうしても、国語の本が1冊手に入らなかったことがあった。

父は、その本を借りて来て、カットの絵までも、そっくりに写してくれた。もち論、コピーなどは一般に出廻っていない時代のことで、何日掛かったか私には分らないが、その出来栄は、なかなかのものであった。

この父の手作りの本は、私が今までに出会った最も素晴らしい本である。

私が、自分の子供達に、同じことをしてやれる自信はまったくない。

さて、随分と不景気な話しになってしまった。

私の育った時代を書こうとすると、いつの間にか暗い方向に行ってしまうのは致し方ないのかも知れない。このように教科書すら満足にない時代に育ったおかげで、1冊の本、1つの情報の大切さ、有り難さを体得させられたことは、私にとって、大変貴重な経験であった。

確かに、今は、本の種類も多く、必要とするものは、すぐに手に入る。また、コピーやオフコンの発達で文献検索などは、昔のように苦勞せず済む、それはそれで大変有り難いことである。

反面、情報の量と質とが混同されて、量を誇って質を軽んずる傾向や情報に依存しすぎて振りまわされるといったことも、現実に見られることである。

現在のように、便利な時代に暮らしていると、それに慣らされて、当り前になってしまう。時には、1冊の本の有り難さ、1つの情報の重さを、顧みることでも必要ではないだろうか。

(医学部事務局臨床教室関係)

情報センター機械化計画

機械化計画の展望

安西 郁夫
(三田情報センター副所長)

1. 機械化の意義

図書館業務の機械化 (Library Automation) の意義と必要性については、MEDLARS の稼動開始 (1964) や MARC II テープの頒布開始 (1969) 以来、多くのライブラリアンによって説かれており、筆者が今ここでそれを蒸返すつもりはないが、情報化社会という新しい局面で当然予測される情報に対するニーズの多様化・複雑化に対応するためには、必然的に自動化を推進せざるをえないと思われる。

研究・教育情報センターの機械化は、三田情報センターが昭和45年度に稼動させた B I C C (図書予算管理) システムに始まり、P I C C (逐次刊行物目録), A I C C (図書受入), C I C C (閲覧・貸出統計) 等のシステムが相次いで開発され、稼動するに至ったが、いずれもバッチ・システムであった。その後、日吉情報センターがオフコンによる館外貸出を始めたほか、医学情報センターおよび理工学情報センターの J O I S 端末の設置、三田情報センターとアジア経済研究所の LC/MARC のオンライン検索実験等のオンライン処理の例もあるが、主要システムは計算センターの歴代共用機 (I B M 7040, UNIVAC 1106, FACOM 160) を使用してのバッチ処理を続けて今日に至っている。

時代遅れのバッチ処理とはいえ、スタッフの意識にインパクトを与え、それなりの効果・効率をあげたことは確かであるが、国立大学の図書館専用機がすべてオンライン指向であることから明らかなように、今日の図書館業務処理はオンライン・リアルタイム・システムであることが当然視されているのである。

2. オンライン化専用機計画

昭和56年12月に三田の新図書館が竣工した。この新館の5階にある情報処理室は、オンライン指向の図書館業務専用機を導入するためのスペースとして設けられたものである。

昭和57年4月の新館オープンに続いて機械化計画案の作成作業が始まり、7月には「研究・教育情報センター機械化計画書 (予備版)」が文学部図書館・情報学科の協力のもとに予備調査委員会の手によって脱稿し、所長名で関係者に対するアピールが行われた。その中で、専用機の必要な理由として、次のような項目が示されている。

- ・蔵書に関するデータ (目録) は、理論的には無限であること
- ・従って、ファイルのデータ量が膨大になること
- ・膨大なデータ・レコードを管理できる最適なデータベース管理システムが必要なこと
- ・利用者のオンライン目録へのアクセスはランダムに生ずること
- ・貸出システムの稼動は開館時間と平行していること
- ・外部データベースとの接続が必要であること

このアピールに引き続いて情報センターと図書館・情報学科が共同の計算機調査委員会を発足させ、図書館業務処理と図書館・情報学の研究・教育用に適した機種に関して、国産系3社と外資系2社の中位汎用機、下位汎用機、ミニコンを調査し、58年1月最終報告書を担当理事に提出した。

3. 大型汎用機の共用

最終報告書をめぐる担当理事、三田計算室長と調査委員会代表との協議・懇談が58年1月末に持たれ、最終報告書が示した選択肢 (第1順位: 専用中型機, 第2順位: 共用大型機) のうち、財政的見地からは第2順位の共用大型機が現実的であるとの当局見解が示され、調査委員会も次の諸点が了解されたことにより、59年度にリプレースされる三田計算室の大型機を共用することを了承した。

- ① 58年度後期と59年度は、三田計算室の後継大型機を使用してシステムの開発を行なう。
- ② データベースの格納に必要な専用ディスクを確保し、DBMS（データベース管理システム）を導入する。
- ③ 他地区情報センターとのネットワークはシステム開発期間中には構成しない。
- ④ 館外貸出システム稼動用としてクラスター機を導入し、クラスター用ディスク（1GB程度）を用意する。
- ⑤ データベース更新については運用時間帯の調整をはかる必要がある。
- ⑥ 一定のレスポンス・タイムを保障するためには、計算室の大学院新棟への移転期に光ファイバーでホストと結ぶ必要があろう。
- ⑦ 開発期間中はSEのサポートを必要とする。
- ⑧ 58/59年度の経験・実績に基づき、60年度以降の計算機システムのあり方を見直す。

.....

三田計算室の後継機種はその後 FACOM-M360（主記憶容量8MB）に決定された。

4. KULAS の概要

これから開発を始めるオンライン・システムはKULAS (Keio University Library Automation System) と呼ばれ、オンライン化による図書館業務処理の効率化を高め、利用者へのサービスの向上をはかることを目的としている。KULASは、選書、収書、整理、貸出、情報サービス、雑誌管理、総務等のサブシステムによって構成されるトータル・システムの構築を目標としている。

システムの開発は、従来と同じく、情報センターのスタッフが行う。第1次5ヶ年計画では、まず三田情報センターにおいて標準システムを開発し、近い将来における4センター・ネットワークの核とする。昭和58年9月にディスプレイ端末8台とシリアル・プリンター2台を導入し、10月からのシステム開発とデータ入力用に使用する。プログラム言語はコボルならびにDBMSが提供するエンドユーザ言語を使用する。三田情報センタ

ー内にはすでにプロジェクト・チームが結成され、システムの概念設計を開始している。

各サブシステムの稼動目標は、現時点での計画では、次のとおりである。

A. 貸出	60年4月
B. 整理（目録業務）	61年4月
C. 総務（予算管理・支払業務）	61年4月
D. 収書（受入業務）	62年4月
E. 雑誌管理	63年4月

これらのサブシステムの稼動に伴いながら、年次的に端末に増設し、昭和63年度には、ディスプレイ端末27台、シリアル・プリンター11台を使用する予定である。

オンライン目録のパブリック・アクセス・システムは昭和63年度以降の開発となるが、それが稼動するとすれば、端末はさらに増設することになる。

稼動年次の違いはほぼ開発順位を示しているが、トータル・システムとしての一貫性を保つために、主要部となる貸出、目録、受入、雑誌について、安田、長島、渡部、安西がそれぞれファイル設計を分担して摺り合わせを行なった上で、各サブ・システムの基本設計・詳細設計に入る予定である。

5. 今後の問題点

KULAS 運用の核となるものは蔵書ファイルであるが、学術情報システムが未稼動の現時点では、MARC (LC, Japan) 書誌データをデータベース化し、蔵書とマッチングさせて、ヒットした書誌レコードを蔵書ファイルに取り込むことが必要となる。三田情報センターではすでに入力用のMARCレコードを約200万件用意しているものの、三田計算室に配置されるディスクの容量が少なく、MARCの全レコードを同時に展開することは不可能であることが明らかになった。これは我々にとってはかなり致命的な障害である。どのような工夫ややりくりが可能であるかは、現時点では何とも言えない。

研究・教育情報センターの業務機械化

長 島 敏 樹
(三田情報センター整理課)

I. はじめに

慶應義塾大学研究・教育情報センターは、各キャンパス毎に置かれた4つの情報センターから構成される。各情報センターは、それぞれ利用者層、蔵書構成などに特徴があり、周囲の環境は様々である。

業務の機械化(コンピュータ化)も、それぞれの事情に合わせ、これまで独自に進められて来た。本論文では各センター毎に、業務機械化の歩みと現状を概観すると共に、今後の展望も試みる。

II. 三田情報センター

三田情報センターでは、KULICシステムという名称で、1969年頃、業務機械化に着手した。図書予算管理システム(BICC)を始め、現在まで部分的にも完成したシステムは第1表に掲げたものである。システムの設計、プログラミングは、すべて三田情報センター職員の手によって行なわれてきた。

コンピュータは、三田計算室のFACOM M-160で、CPUは2MB、漢字も使用できるが、三田キャンパス内外の事務処理や、研究、教育と共用である。使用する時には、その都度計算室まで足を運び、バッチによる処理を行なっている。

第1表 KULICシステム一覧

AICC: 収書・受入管理システム
BICC: 図書予算管理システム
CICC: 閲覧・貸出管理システム
DICC: 文献情報提供システム
MICC: MARC II テープ利用システム
PICC: 雑誌管理システム
Japan/MARC利用システム

以下、三田情報センターにおいて、現在稼働中のシステムを中心に述べる。

A. BICCシステム

三田情報センターのコンピュータ・システム中、最も早く、1970年には稼働を開始した。現在、最も完成されたシステムである。

このシステムでは、図書予算の使用状況を月々把握したり、業者(書店)への月々の支払い額を知ることができるとともに、蓄積されたデータを利用し、統計資料を得ることができる。¹⁾

現BICCシステムでは、支払い関係の数値データしか扱っていないが、後述するAICCとの関連で、書誌データともリンクさせ、機能を拡大させることが望まれる。

B. CICCシステム

これは本来、総合的な閲覧管理を目指したものであるが、現在行なっているのは、閲覧、貸出しの統計処理だけである。

統計処理は、1日ごとのデータを人手で集計し、それを1ヶ月分まとめてカードにパンチし、各種統計表を打ち出す。さらに1年分をまとめた統計表も打ち出している。

閲覧業務で、最も手間がかかり、複雑なのは、毎日の貸出し、返却手続きであろう。利用者は貸出しの都度、貸出票に氏名、所属や、書名、請求記号を記入しなければならない。閲覧カウンター係は、その貸出票と図書とを見比べ、記入に誤りが無いか確認の上、Date due スリップと貸出票に返却期限を押印する。さらに、貸出票を請求記号順にファイルし、返却されたらそのファイルから貸出票を抜取る、返却期限の過ぎたものを探し出し、返却請求をする、等々の作業がある。これらは忙しいからといって翌日にまわすわけにはゆかず、その場、その場で確実に処理しなければならない。間違いも発生しやすい。

そこで、これらの手続きを近い将来機械化することを目指し、目下、計画を進めている。計画で

は、OCR用文字で書かれた図書のIDナンバーと、利用者の持つ利用券のIDナンバーとを端末のリーダーで読み込ませるだけで、貸出し、返却の手続きが行なえる予定である。さらに、先に述べた統計的データも自動的に集まり、利用者の問い合わせに応じることや、毎年、春休み中に多くの人手と日数をかけて行なっているインベントリーにも応用できるはずである。これは、現在一部の公共図書館や日吉情報センターで行なわれているものと、外見的には似ているが、三田情報センターの120万冊の蔵書、さらには4センター全体の蔵書を対象とし、情報センターの他の業務の機械化との関連を考え合わせた、大きな計画の一部としてとらえられており、その点で他に例の少ないものと言えよう。しかしそのためには、コンピュータが、少なくとも図書館開館時間中は稼働している必要がある。また、あらかじめ三田情報センター全資料の請求記号やIDナンバー、書誌データ、利用者に関する情報等を入力し、図書には機械可読のラベルを貼る作業が必要である。

C. PICCシステム

これは、雑誌の受入れ、所蔵情報などを含む、総合的な雑誌管理システムを目指している。現在は、各センターで所蔵している雑誌の総合目録を作成している。この目録は、新図書館の完成に伴ない、所蔵場所がコード番号だけでなく、漢字でも表わされるなどの改良が行なわれた。書誌データは、英数字だけが使用されているので、やや見にくい点もある。

雑誌管理ではこのほか、毎日のチェック・イン、欠号請求、製本、支払いなどの作業がある。これらが機械化されると、チェック・インはISSNと番号を入力するだけで済むといったことも可能であり、欠号も、別冊、増刊のような特殊なものを除けば自動的にチェックできるといった利点がある。ただし、そのためには、オンラインで常時処理可能でなければならない。

D. Japan/MARCシステム

国立国会図書館が作成しているJapan/MARCテープをもとに、選書から、整理、閲覧など、全ての業務で漢字を含む和書の書誌データを幅広く利用しようというシステムである。

Japan/MARCテープは、1981年4月に頒布が開始された。三田情報センターでは、それに先立ちテスト・テープの提供を受けたのを始め、様々な利用システムの実験、開発を進めてきた。1982年度からは、まず整理課で実用的な利用が開始された。

整理課では、以前から国立国会図書館印刷カード(以下「国会カード」という)を購入し、和書の目録作業に利用してきた。国会カードはJapan/MARCと同じデータからコンピュータによって作成されるが、図書の出版からJapan/MARCの入力、国会カード作成までのタイムラグが大きく、図書とカードとをつき合わせる作業が面倒である。しかも、カードの蓄積、保存にも多くの時間とスペースを必要とする。そこで、Japan/MARCから、機械的に必要な図書のレコードを検索し利用する方法を採用した。これは、以下のような手順による。

まず、図書の書名、著者名の初めの3文字ずつを組み合わせた6文字、あるいは書名の初めの6文字を検索キーとする(カタカナを用い、濁点は省いている)。それをデータ・カードに打っておく。毎週、Japan/MARCテープが送られて来る都度、インデックスを作成し、あらかじめ用意した検索キーを持つレコードを抜き出す。ノイズとして、不必要なレコードもある程度出てきてしまうが、70~80%の割合で必要なレコードを抽出することができる。

はじめは、この結果をもとに国会カードを利用していた。1983年3月からは、国会カードの購入を中止し、それに代って、特注のアウトプット用紙によって、三田計算室のコンピュータを使用し、Japan/MARCから国会カードとほぼ同様の目録カードを打ち出している。ただし、現在の

コンピュータでは、ハードウェア的に十分な厚さのカードが打ち出せないため、パブリック目録用には、これをカード複写機でコピーして使用しなければならない。

Japan/MARCの検索には、以上のようなカタカナ6文字を使用する方法が比較的有効である。だが、日本語の検索には、漢字を用いるのが最も有効である。そのためには、日本語ワードプロセッサの機能を持つ端末による、オンライン検索をする必要がある。

以上述べたように、現在はJapan/MARCから必要な書誌レコードを抽出し、目録カードを打ち出して利用することが中心である。将来は、和書のデータベース作成の基礎として利用されるであろう。このデータベースは、選書から閲覧まで、ほとんど全ての業務で使用される図書館機械化の核を成すものであり、通常、オンラインでアクセスされる。このように利用されてこそ、Japan/MARCの真価が発揮されると言えよう。

E. その他のシステム

1. AICCシステム

これは、収書・受入れ業務全般をコンピュータ化することを目指したものである。このうち、継続図書管理サブシステムが大部分完成した。しかし、一部プログラムを修正する必要がある。追加、更新データの入力もされておらず、現在は使用していない。

このAICCは、使用するファイルやデータがBICCと共用できるものが多く、両者をまとめ、オンラインで常時処理できるシステムとなることが望まれる。現在の作業プロセスでは、発注の際、注文票に記入するものと同様のデータ項目を、納品の際の仮納品書や、登録台帳に、2度、3度と記入しなければならない（納入業者が行なう作業もある）。このような重複記入は、発注の際にコンピュータに入力しておき、後に金額、登録番号を追加したり、あるいは、必要な項目だけをプリンターから出力することにより解消でき

る。更に、ISBNやLCCN、書名中の単語等、様々な項目からオンライン検索できるようにしておくことにより、発注、重複調査業務の煩わしさは減少し、ミスも防げるであろう。また、利用者や納入業者の問い合わせにも即座に対応できるようになる。更に、目録作業にもこのデータを利用できる。

2. DICCCシステム

これは、カレント・アウェアネス・サービスや、SDIサービスを行なうことを目的としたものである。一部、試験的にプログラムが開発されたが、実用化はされていない。

3. MICCCシステム

これは、LC/MARCテープを、選書、整理など、様々に利用しようとするものである。1972年度に着手され、いくつかのプログラムが開発された。だが当時、同種の利用システム開発を進めていたアジア経済研究所と技術交流を行ない、同研究所と、LC/MARCのオンライン情報検索の実験を行なう協定を結んだ。1976年度末には、ディスプレイ端末とプリンタを導入し、整理課の洋書目録業務用として、公衆回線による書誌情報の検索を開始した。一方、三田情報センターではLC/MARCテープの購入を中止し、独自に開発して来たMICCCシステムも、その後は稼動していない。

アジア経済研究所のシステムは、ディスク容量の制限から、収録範囲に限られる。また、レコードの累積、更新が3ヶ月に一度しか行なわれない、不用になったCIPコードが消去されないといった問題点がある。

なお、新図書館完成に伴い、整理課用として利用してきた端末を、1階レファレンス・カウンターに移し、一般利用者にも無料で開放している。ただし、検索するファイルが、三田情報センターの蔵書ファイルではないため、検索結果が、即、利用者の要求を満たすことにはつながらないこと

もある。蔵書ファイル(データベース)の構築と、検索システムの完成が待たれるところである。

Ⅲ. 日吉情報センター

A. HBICC システム

これは、三田情報センターのB I C Cシステムを、ほとんどそのまま日吉情報センターに導入したものである。1974年度から稼動している。

B. 貸出システム

日吉情報センターでは、独自に小型のオフィスコンピュータを導入し、1982年4月から、貸出しシステムを機械化した。プログラムは、公共図書館用のパッケージをもとにしている。扱うデータは、利用者の氏名(カナ)、利用者番号、図書番号、請求記号などで、書誌データは含まれていない。

このシステムでは、貸出し、返却業務を初め、各種問合せ、利用統計等が行なわれている。これによって、事務手続が簡略化されただけでなく、新しいサービスも行なえるようになり、利用者も大幅に増加している。²⁾

C. 和書索引作成システム

これは、カード目録に代わるものとして、1982年秋に一部稼動を開始した。著者、書名、分類それぞれについて、正式の目録記述より簡略な記述のリストを作成するものである。

Nippan/MARC をベースとし、これに無い図書については、同センターでデータを作成し、外注によって、機械可読化する。また、Nippan/MARC に無い、アクセス・ポイントのローマ字や、請求記号、登録番号も入力している。

リストの打ち出しは、漢字が含まれるが、日吉計算室のFACOM M-180IIADでは、現在漢字処理が行なえない(1983年10月から処理可能となる予定である)。そこで、日吉センターの職員が三田まで足を運び、M-160を使用して処理を行なっている。

Ⅳ. 理工学情報センター

理工学情報センターでは、コンピュータの端末機を購入し、外部のデータベース提供機関の提供するデータを利用している。

まず、1980年7月には、日本科学技術情報センターのJOISにより、JICST ファイルの検索を開始し、一般利用者にも公開した。続いて同年10月にはDIALOGの利用も開始した。今後は、自館の蔵書を対象としたシステムを開発してゆく必要があるだろう。

Ⅴ. 医学情報センター

医学情報センターでは、MELIC ACS (MEDical Library and Information Center Automatic Control System) と呼ばれる総合的なコンピュータ・システムを志向し、独自にシステムの開発を進めてきた。現在、受入管理サブシステムを始め、いくつかのサブシステムが稼動中、開発中である。³⁾ これらのシステムの設計、開発は、情報センター職員自身が行なっている。

使用コンピュータは、慶應病院・病院情報システム部のMELCOM COSMO 700 IIIであり、これとCRT端末、プリンタを、専用回線でつないでいる。このため、MELIC ACSでは、オンライン処理によっているものが多い。

A. 受入管理サブシステム (ACQSYS)

1980年4月に稼動を開始した、MELIC ACS中で最初のサブシステムである。資料の発注、重複調査、受入、登録、会計などの処理を行なっている。

中心となるデータベースは、他のサブシステムとも共用できるよう、書架目録を機械可読化したものである。このほか、インデックス・ファイル、注文ファイル、会計ファイルを持つ。

注文ファイルの要素は、データベースの要素と同一で、資料が納品されると、端末からの操作で注文ファイルからデータベースへ、レコードの転送が行なわれる。また、インデックス・ファイル

による検索は、LCCN, ISBN, ISSN, MELIC 番号, 登録番号, 注文番号, 著者, 書名, 叢書名からが可能である。

なお, 現在, 漢字データは使用しておらず, 和書のデータにはカタカナを使用している。

B. その他のシステム

MELIC ACS では, 貸出し管理サブシステムがパイロット・システムとして開発されている。また, 雑誌管理サブシステムも開発中である。

MELIC ACS とは別に, 理工学情報センター同様, JOIS, DIALOG 及び BRS による検索サービスも行なっている。

VI. 職員の研修

図書館業務の機械化を進めるに当り, その作業を外部の業者に委託するか, 独力で行なうかについては, どちらが良いとは一概には決めかねる。だが, 独力で行なう場合には, 開発段階における開発側と利用者側相互の誤解, 知識不足, 無理解による弊害は無く, システムの変更も行ないやすい等の利点を挙げることができる。また, 外部に委託する場合でも, システムの利用者である図書館, 情報センターの職員が, 少しでもコンピュータに関する知識を持っていれば, より理想に近いシステムが開発されるであろう。

研究・教育情報センターでも, 業務機械化の多くの部分は, センター・スタッフ自身の手によって進められて来た。そして, そのための要員養成の必要から, 1972年度より新規採用大卒男子職員に対し, 4月, 5月の午前中を使い, COBOL 言語の修得を中心としたコンピュータ研修を開始した。1973年度からは人事部の要請に応じ, 全塾の新入男子職員の研修を行なうことになった。現在これは, 事務機械化統合促進センターの手に委ねられ, 全塾の新人研修の一部として位置づけられるまでになっている。このほか, 一部では, 海外留学による研修, 女子職員の研修も実施している。

VII. 機械化の将来

図書館業務の機械化においては, 情報検索を始め, 選書から整理, 貸出し業務まで, ほとんど全ての処理がオンラインで即時に行なわれることが望ましい。そのためには, 大量のデータを瞬時に処理できることが必要である。しかし, 現在利用できる計算機システムでは, 処理能力が不十分であり, 他の大学事務との関係もあり, 図書館がオンラインで常時処理を行なうのは難しい。これまで, 医学情報センターで, 一部オンライン処理を行ない, 日吉情報センターでは, 小型コンピュータを貸出し業務に常時利用している。だが, これらは蔵書量が比較的少ないから可能であったとも言える。120万冊の蔵書を持つ三田情報センターで同様のことを行なおうとすれば, その準備だけでもかなりの作業量であるし, コンピュータの記憶容量も膨大なものが必要になる。FACOM M-160の現システムでは容量不足である。日吉情報センターの場合も, 記憶容量の制限から, 書名, 著者などの書誌的データは入力できないのである。

本年(1983年)10月には, 三田計算室のコンピュータが大型(FACOM M-360)化され, それに伴い三田情報センターでも, ようやく専用ディスクと端末8台程度が確保できる予定である。それに合わせ, 情報センター全体の総合的な機械化を目指した計画が進行中である。これは, 今までどちらかと言えば個々の業務ごとに行なわれて来た機械化システムを統合し, 4情報センターをネットワーク化し, オンラインで結ぶものである。さらに, 外部の図書館, 文部省の学術情報システム等との協力も考慮されている。そのため, 現在, 週1回程度の割合で, 三田情報センターのスタッフ4名及び, 文学部図書館・情報学科の教員によるコンピュータ導入委員会が開かれている。

今後, 最初に機械化が計画されているのは, 三田情報センターの貸出し業務である。1985年度中に完成し稼働できる予定であるが, 他業務との関連性も考慮されており, 将来は4センター全体の

貸出しシステムを一括するものである。このシステムで使用される蔵書ファイルは、日吉情報センターの貸出しシステムのファイルとは違い、書誌データをも含み、情報センター内のほとんどの業務で共用する、最も中心となるファイル（データベース）である。このファイルのソースのひとつとなる LC/MARC テープは、現在までの分をアジア経済研究所から購入した。また、利用者に関する情報は、教務部の持つ学籍ファイルや、人事部の持つ人事ファイル等のデータを利用する予定である。

コンピュータ導入委員会では、各業務の内容分析、機械化の方法を検討すると同時に、コンピュータ・システムそのものの研究も行なっている。1985年には、その時点までの機械化の成果や問題点をもとに、図書館の機械化に適したコンピュータ・システムとはどのようなものか、再検討をする予定である。

一方、導入委員会に加わっている図書館・情報

学科では、研究・教育にコンピュータを利用することを希望している。これは、図書館情報大学ではすでに行なわれており、機械化が進行しつつある図書館界に優れた人材を送り出そうとする同学科としては、当然必要なことである。そのためには、計画が進められている情報センター機械化システムの一部に、同学科の研究・教育プログラムを組み入れ、実際の図書館業務に沿った研究・教育を行ない、しかも情報センター業務に支障の無いよう、配慮が必要である。

参 考 文 献

- 1) 安田博. "KULIC システム". 医学図書館. Vol. 22, No. 1, p. 15-27 (1975)
- 2) 藤井裕子; 西山知子. "Circulation system の機械化". KULIC. No. 16, p. 39-42 (1982)
- 3) 渡部満彦. "図書館とコンピュータ (1): 機械化の実例". 医学図書館. Vol. 29, No. 2, p. 122-134 (1982)

新 図 書 館 と 見 学

このことについては、16号でも新館開館時の昭和57年4月から10月までの半年余の見学状況を紹介したが、開館後1年半余を経過した今も、学外からの見学者数は一向に減る気配も無い。むしろ増える傾向にある。開館してから今年10月末までに新館を見学した団体は313団体、見学者数4,032名である。内訳は表1の通りである。この数字は事前に見学の申込みを受けた分の数字で、原則として図書館側で案内者をつけたものである。この他にも予告なしに直接来館する個人の見学希望者も多く、また学会等でAVホールを利用する場合、学外の会員はそのついでに個々に見学をするケースも多い。したがって数字に表われていない見学も多く、実際の見学者数は上記の数よりも多いことになる。

見学者は大学図書館等の図書館関係者だけでなく、最近では学会、建築・設計関係者、大学の企画・施設関係者、また塾員の三田会等の見学

も多くなっている。

見学の申込みは三田情報センター総務課で受付けている。見学者が多くなれば、それだけ館内の閲覧者にとっては迷惑ともなるので、案内をする方としては神経を使うことになる。したがって団体の見学者は入館者の比較的少ない午前中の早い時間帯に受付けるようにしている。

表1 新館見学者数(昭和57年4月~58年10月)

団 体 種 別	団 体 数	見 学 者 数
塾 内	17	909
大 学 図 書 館	141	671
公 共 図 書 館	16	98
専 門 図 書 館	23	149
学 校 図 書 館	8	146
図 書 館 関 係 団 体	22	596
そ の 他	86	1,463
計	313	4,032

わが国大学図書館における 機械化の現状

渡部 満彦

(三田情報センター資料課長心得)

はじめに

日本図書館協会は昭和56年度に国公立大学、同短期大学、高等専門学校¹⁾の図書館1,257館に対してコンピュータの利用およびその目的についてアンケートを試みている。コンピュータを導入しているのは全体で21%であるが、これが国立大学では38.9%、公立大学22.2%、私立大学21.5%となっている。²⁾ここで私学に比して官学がコンピュータ導入に積極的なのは1969年文部省のPPBS (Planning, Programming and Budgeting System) の「大学図書館の管理運営の改善」の影響のためと思われる。このことは、コンピュータの利用目的で私立大学が情報検索、目録作成、その他、閲覧業務、発注受入の順なのに対して、国立大学が情報検索、発注受入、閲覧業務=目録作成、その他で、発注受入が第2位を示している³⁾ことで立証できそうである。また、恐らくは、国立大学が図書館専用機でシステムを開発しているのに対し私立大学は学内に設置されている。例えば計算センター等のコンピュータを共用して機械化に当たっているように思われる。私立大学のこのような事情は図書館業務をこなせるようなコンピュータ(ハードウェア資源)が未だ高価であり、また開発にあたるプログラマ、システム開発要員(人的資源)の確保が困難なことに帰せられるのかも知れない。

以上のことから、わが国の大学図書館における機械化は、ここ当分、官高私低で行われるだろうが、後述するように京都産業大学や金沢工業大学のケースは私立大学の中では稀有な例である。

1. 学術情報システムと大学図書館

「出版ニュース」1983年6月下旬号は〈「学術

情報システム」について考える——大学図書館だけの問題ではない⁴⁾〉、〈「学術情報システム」関係文献——大学図書館の発展か解体か〉(上点は引用者)⁴⁾と若干ジャーナリスト的な標題を付けて国立大学の図書館員に論じさせている。本節での筆者の目的は、学術情報システムが大学図書館を⁵⁾発展させるのか解体させるのか等とその是非を論じるのではなく、私立大学図書館にあってもその機械化を進めて行く上で、学術情報センターを核とする学術情報システムを考慮しなければならないということに言及することにある。

周知のように、昭和55年学術審議会は文部大臣の諮問に対して「今後における学術情報システムの在り方について」を答申し、文部省はこれを受けて学術情報センターシステム開発調査協力者会議を設置(昭和55年度)し、昭和57年度までに情報検索システムと目録システムを中心に調査を行い、特に昭和57年度には〈協力者会議の中に総合部会、目録システム部会、データベースシステム・ネットワーク部会を設け、実際的な運用条件を設定し⁶⁾〉センターシステム設計仕様を検討している。さらに昭和58年4月1日東京大学文献情報センターが発足し、これは学術情報センターシステムの目録システム機能を担うもので、文献情報の全国的流通システムの研究開発と要員の教育訓練に力点を置いている。⁶⁾昭和59年度後半には目録システムの一部実験開始が予定されているが、その概要は倉橋の解説で知ることができる。⁷⁾これによれば同システムは全国の大学図書館が所蔵する図書館資料の書誌情報をセンターで維持することによって総合目録の役割をはたすと共に、参加図書館による分担目録作業を行うネットワーク・システムを志向している。これは以下のようなサブシステムを持ち、

1. 図書サブシステム
2. 雑誌サブシステム
3. 相互貸借サブシステム

1)、2)ではJapan MARC, LC MARC, 学術雑誌総合目録をデータベースとして上記の目的を逐

行し、3)では学術情報センターにメール・ボックスを置き、〈電子メール〉によって図書館間の複写サービスの申込み、回答、料金精算等を行い、またこれに関連する統計等の処理を行う。

このようなネットワーク・システムは既に米国においては実現されており、これらの得失を検討してわが国の風土に合った最適なシステムの出現を筆者は期待するものである。国立大学図書館協議会は1983年5月23日理事会の決議に基づいて、6月7日文科大臣等関係機関に「学術情報システムの早期実現について」の要望書を提出した。⁸⁾同様の要望書を昨年同日にも行っているが、学術情報センターの創成は私立大学図書館にとっても待望されるものである。

学術情報センターへの道程への具体的なものとしては東京大学文献情報センターの学術雑誌総合目録と文編データベースの1985年5月創成や、北部九州地区国立大学図書館機械化ネットワーク協議会、近畿北部地区国立大学図書館機械化ネットワーク協議会、東京地区国立大学図書館ネットワーク研究会などが活発な活動を行っている。特に、東京地区国立大学図書館機械化ネットワーク研究会の書誌制御部会はオンライン目録とオンライン目録作業を分析し、収書・受入部門、目録部門、閲覧部門のそれぞれの単位における書誌データの様相を検討すると共に、UTLAS, OCLCの端末機能を調査し、要求機能を記述している。⁹⁾大阪大学にあっては九州大学、名古屋大学に続いて地域センターシステム構想を土台に大阪大学における学術情報システムの改善整備について検討している。¹⁰⁾中国四国地区大学図書館協議会にあっては、学術情報センターシステム構想における中国四国地区ネットワークの協力体制について、国立大学部会で協議している。北海道には北海道地区国立大学図書館情報処理ネットワーク協議会に図書館業務機械化開発専門委員会を設けて北海道大学を地域センター図書館としている。¹¹⁾

学術情報センター構想に対する国立大学の以上のような対応に対して私立大学ではどのような現

状であろうか。実のところ筆者は私立大学図書館協会地区研究部会等に関係する機会を持っていないために、私立大学図書館が学術情報センター構想にどのような対応をして行こうとしているのかわかりかねているが、知識を持ち合せていないが、文献を追いかける限りでは私立大学が地区ネットワークを形成して来るべき学術情報センターに参加しようというような動きはなさそうである。ただ昭和57年度に東地区部会で私立大学図書館協会機械化推進委員会の設置が討議され、その主旨はネットワーク化に対して私立大学としてある程度の方向づけが必要であるということであった。今迄に2回以上の会合がもたれたが具体的なレポートは出ていないようである。

図書館の機械化とは自館が所蔵している図書館資料に関する書誌情報とこれに伴う管理情報を最適に機械可読化(データベース化)し、これを迅速にオンラインで引き出すということであれば、学術情報センターはこの中核部分を代替してくれるので、各館の機械化の様相は現在のものとは余程違ったものになると考えられる。従って、私立大学図書館協会機械化推進委員会の活動に期待したい。

2. 国立大学の機械化の現状

「大学図書館の機械化」によれば、

わが国の大学図書館で試験的にせよ電算機が動き出したのは1966～67年である。この最も初期に属する代表的な図書館は、小樽商科大学、東京大学医学部、慶應大学医学部、京都産業大学などである。この中で東大医を除いてはいずれも図書館独自の電算機でなく、大学の計算センター(小樽商大、京産大)あるいは計算機メーカー(慶大医)の電算機を使った機械化であった。東大医は厳密には図書館業務専用ではないようだが、図書館の中に備え付けられ図書館が主体的に利用できるものとしては、大学図書館で最初(1967年)のものとして知られている。

このようなそれぞれの組織内の自主的計画と犠牲の上に始められた先駆的段階を大学図書館業務機械化の第Ⅰ期ということができよう。¹²⁾ ということである。

文部省の PPBS 計画に基く機械化装置設備費（図書館近代化設備費）により1971年大阪大学に FACOM 230-15 が導入されたのを機に群馬大学（1972）、東京工業大学（1973）、福井大学・小樽商科大学（1974）、広島大学・長崎大学（1975）、東京学芸大学・香川大学（1976）、鹿児島大学（1977）、千葉大学・横浜国立大学（1978）、長岡技術科学大学（1979）と続いてコンピュータが導入された。これらの図書館の機械化の現況は「大学図書館研究」等に紹介されている。

一方、図書館情報大学附属図書館では昭和56年5月 PDP 11/44から HITAC M-180 改に機種を変更し、附属図書館職員と教官による「図書館業務機械化検討会」を発足させ、¹³⁾ 昭和57年1月に LC-MARC, JAPAN MARC の検索システムを、昭和57年10月には貸出、返却システムを稼働させている。図書館情報大学はシステムの範囲を目録業務、貸出業務、雑誌管理業務、受入業務及び検索サービス業務とし、そのシステムの質はただ単に稼働していればよいといったお座りなものではなく「世界的にみて、最高レベルのもの」を志向している。¹⁴⁾

図書館情報大学附属図書館のシステムは全館的トータル・システムであるが、このようなシステムの例としては筑波大学附属図書館の TULIPS (Tsukuba University Library Information Processing System) がある。このシステムの目的は筑波大学附属図書館における図書、雑誌等の予算管理、選書、発注、受入、目録、貸出、返却、所蔵状況問合せを含む、ほぼ全ての業務を情報処理の諸技術の集合体を用いて集中管理すること及びそこで管理される情報の流通利用を迅速かつ正確に行うことにある。¹⁵⁾ そして TULIPS の基本思想として、

1. 安定したデータベース管理システムを使用すること（現在は米国 CCA 社開発の Model 204 を採用している）
2. 簡易なユーザ言語で業務プログラムを作成すること
3. 設計、開発、運用、保守は図書館員が行うこと
4. データベース管理システム及びこれと関連するものは館外が行うこと

を特徴としている。開発にあたっては昭和53年度内に和書 126,000件、洋書 50,000件の目録データを外注パンチ（英数カナ文字のみ）し、昭和55年4月から業務用として筑波大学学術情報処理センターの ACOS 800Ⅱで運用の途についたが、昭和56年3月からは FACOM M160F（学術情報処理センターに設置）に移行している。現在、学内研究者にオンラインで図書館情報（図書、雑誌、発注・受入状況、予算等）をサービスする情報検索システムを中核に、¹⁶⁾ 予算管理、図書選書・発注、図書受入、寄贈図書受入、業者管理、図書目録、問合せ、文献複写、貸出、返却、更新、予約、貸出リクエスト、紛失処理、紛失解除、利用者管理、不正持出、督促、学系等資料室貸出図書更新、学系等資料室内貸出、利用統計、雑誌選書・予約・契約、雑誌予算管理、雑誌受入、雑誌目録、支払、精算、製本、雑誌利用、コンテンツシートサービス、メンテナンス、修正、ファイル更新等の業務のために150本以上のプログラムが作成されている。

さきに触れたように学術情報センターシステム構想の地域センター（RC）としての役割を担う名古屋大学は昭和57年1月に FACOM M-160F を導入してシステムの開発にあたっている。基本計画は東海地区国立大学図書館協議会（愛知教育大学、岐阜大学、浜松医科大学、三重大学、名古屋大学、名古屋工業大学、静岡大学、豊橋技術科学大学）図書館業務電算処理委員会と名古屋大学附属図書館業務電算処理委員会、同電算処理体制準備委員会によって立案された。名古屋大学と豊

橋技術科学大学が昭和58年3月から公衆回線によってEDS-Vを介してネットワーク化され、昭和59年初期には名古屋工業大学、岐阜大学と接続される予定である。現在稼働のシステムは昭和57年1月から閲覧管理、雑誌管理（製本は除く）、昭和58年1月からはMARCファイル、雑誌ファイルの検索業務が、昭和58年4月から図書管理（受入業務）、予算管理である。「報告書」¹⁷⁾の段階では図書管理（目録作成業務）は運用テスト中とのことである。なおデータベース管理システムは筑波大学と同じModel 204を使用している。「報告書」はシステムの特徴について特に列挙していないが、〈機器構成は、本学附属図書館がRegional Center (RC) であり、Member Library (ML) でもあること、また現在、National Center (NC) が未設置である以上現実にその機能の一部を代行する必要があることを背景に、業務形態、規模、内容、処理効率、予算及び設計思想等を総合的に勘案した結果決められたものである〉¹⁸⁾

大阪大学では昭和57年12月ACOS 450が導入された。これに先立ち、図書館が作成した「大阪大学における学術情報のシステム化の理念と改善方策」、「大阪大学附属図書館業務電算化システム」を基に大阪大学学術情報問題懇談会を設け、さらに機械化準備委員会、業務電算化実施委員会を発足させている。実施委員会の構成は幹事班、図書管理ワーキング・グループ、雑誌管理ワーキング・グループ、運用管理ワーキング・グループ、吹田地区推進班となっている。1971年のFACOM 230-151によるシステムが本館の業務のバッチ処理であったのに対して新システムは本館、分館、分室をACOS 450、NECシステム150、NECシステム100でプロトコル化し、これで端末40台によるネットワークを編成し、図書館業務全般をオンライン化するものである。また学術情報センター構想の近畿地区（南部）の地域センターの機能をも担っている。昭和58年5月現在稼働のシステムは全学的な雑誌管理、全学的な図書管理で、JAPAN MARC、日販MARC、LC-MARC等に

よる書誌・所蔵データベースの構築によるオンライン目録が現在検討されている。これはさらに発展して地域総合目録（オンライン）の役割となる。図書管理、雑誌管理の概要については「大阪大学図書館報」V.17 N.1 (1983.4)、V.16 N.5/6 (1983.2)にそれぞれ報告されている。

国立大学における地区ネットワークという考え方は九州大学と他五大学（九州工業大学、九州芸術工科大学、福岡教育大学、佐賀大学、佐賀医科大学）による「機械化ネットワーク協議会」（昭和55年結成）が最も早いものであろう。これに先立って昭和54年9月にワーキンググループを編成している。昭和56年2月ACOSシステム350を導入し、箱崎地区の工、理、農、文学部図書室、堅柏地区の医学分館、六本松地区教養学分館と中央図書館を4800 BPSで結んでいる。昭和56年4月には閲覧サブシステム、図書受入、予算管理、雑誌サブシステムが稼働した。昭和57年1月に九州工業大学にNECシステム100/85が導入され端末システムとなっている。昭和57年8月には和書のオンライン目録でデータが作成され、人名（著者、件名）の典拠コントロールを組込んでいる。^{19)・20)}

3. 私立大学の機械化の現状

既に触れたように図書館の機械化では国立大学の事例報告に比して私立大学のそれは数える程しかない。あるいは筆者が見落しているのかも知れないが、主要な図書館関係の雑誌に報告は少ない。そのような中であって一番華々しいのは金沢工業大学であろうか。

昭和58年8月9日の朝日新聞朝刊読書欄（十二面）に〈未来の図書館：講義・研究にフル活用カード追放、早い本探し〉という見出し金沢工業大学が紹介されたのをご記憶のむきもあろう。〈私大では初の“カードレス”図書館で、もう図書カードを手でくって探す必要はない。利用者が自分で端末機を使って待たずに本探しができる。国立大では長岡、豊橋に続いて、筑波大図書館がカードレスに切り替え中だ〉と報じている。金沢工

業大学は昭和40年単科大学として開学し、昭和57年6月にライブラリーセンターを開館している。この時に、図書館システム LINKIT (Library Information system of Kanazawa Institute of Technology) の稼働を開始した。このシステムは、

- 1) 利用者からの多様化するニーズに的確に、しかも迅速に対応したサービスが提供できるシステム
- 2) 大学の図書館としてカリキュラムと情報サービスが、連動できるシステム
- 3) 情報の有効利用としての立場から将来図書館ネットワーク化を考慮したりソース・シェアリング(資源共有)システム²¹⁾

を志向している。その構成素は図書(情報)購読システム、書誌情報管理システム、書棚(アドレス)管理システム、サーキュレーションシステム、情報検索システムよりなっている。このシステムのユニークさは書棚(アドレス)管理システムで、他の大学図書館では決して考えつかないようなシステムである。機械は計算センターの I BM4341-II デュアルシステムをホストにしており、教育・研究、事務管理の共用機である。

図書館の機械化では慶應義塾大学と同じ位の歴史を持つ京都産業大学は昭和56年京都大学附属図書館と同大学大型計算機センターと図書館業務機械化の共同研究を行うことになり、JAPAN MARC を利用して両大学図書館の目録作業の省力化と効率的な文献情報検索が行えるシステムの開発を研究テーマとした。実際には、昭和56年と57年度分の JAPAN MARC 約6万件のデータを京都大学大型計算機センターの FACOM M-200 を利用して、同機が用意している情報検索ツール FAIRS で種々の実験を試みている。昭和57年9月からは約17万件の JAPAN MARC のデータが検索可能になった。このシステムの利用方法は一般利用者と本図書館業務における書誌情報の検索であり、目録の作成、発注・受入等に適用される。実験開発したシステムの目的は〈MARC デ

ータベースを大学の図書館で利用する場合に必要な機能、各種利用目的に合った検索の方法、検索の効率、端末の使い勝手、J/MARC のデータ形式、データの内容等について、実際のシステムを使って評価、検討すること〉²²⁾であった。

昭和57年4月大阪工業大学中央図書館と摂南大学図書館は I BM4341-L02 と I BM4341-M02 とによるネットワークによって「図書館総合情報処理システム」を稼働させた。対象となった業務は予算管理、発注業務、受入登録(図書、雑誌受入、製本)、貸出・返却・予約業務である。現在、書誌情報の入力カタカナで行われているが、将来的には LC-MARC, JAPAN MARC の利用も検討している。このシステムの特徴は

- 1) より迅速で、質の高いデータ入力手段を追求する。
- 2) 現場の担当者が、容易にシステムの改善を行えるようにする。
- 3) より緻密な情報検索を可能にする。²³⁾

ということにある。

私立大学では以上のシステムの他に関西大学の KULPIS (Kansai University Library Periodicals Information System)、広島修道大学の洋雑誌問い合わせシステム、慶應義塾大学三田情報センター KULIC システム、同医学情報センター MELIC オンライン、南山大学等システムが稼働している。

おわりに

図書館業務を効率的にシステム化しようとするれば、自館の図書館資料に関する書誌情報をデータベース化しなければならないし、また発注に際しては新刊情報もデータベース化していなければならない。このために各館が独自に MARC のデータベースを維持することは経済的にも技術的にも大変な負担であるし、また無駄な二重投資である。その意味ではアメリカにおける OCLC 等の目録情報のインフォメーション・ブローカが産業として成立し、これらを利用して各館が各館の背

だけに合せてシステムを開発している（オハイオ州立大学の Library Control System の事例）のに比較して、わが国は10年以上の懸隔があると言える。そのためにも学術情報センターの設立に私立大学の一員として大きな期待を抱いている。

国際基督教大学図書館の UTLAS 導入は、外部インホメーション・ブローカの利用ということで注目されるが環境的にも経済的にも技術的にも多くの問題をかかえているように思われる。国内にこのようなデータベースが公開され、廉価にオンライン分担目録が行えればわが国の図書館機械化も次の世代に入るとは確実だ。

注

- 1) 日本図書館協会 図書館年鑑 1983 p. 385
- 2) *ibid.* p. 386
- 3) 河田いこひ「学術情報システム」について考える——大学図書館だけの問題ではない 出版ニュース 1983. 6月下旬号 p. 4—7
- 4) 河村宏 「学術情報システム」関係文献——大学図書館の発展か解体か 出版ニュース 1983. 6月下旬号 p. 8—9
- 5) 文部省学術国際局情報図書館課 昭和57年度学術情報センターシステム開発センターシステム開発調査概要 昭和58年3月 p. 1
- 6) 国公私立大学図書館協力委員会大学図書館協力ニュース編集委員会 大学図書館協力ニュース 1983. 7 V. 4, N. 2 p. 4
- 7) 倉橋英逸 学術情報システムにおける目録(解説) 大学図書館研究 1983. 5 N. 22 p. 1—8
- 8) 大学図書館協力ニュース *ob. cit.* p. 10
- 9) 大学図書館協力ニュース 1983. 1 V. 3, N. 5 p. 2
- 10) 山田信夫 大阪大学における学術情報システムの改善整備について——大阪大学学術情報問題懇談会報告—— 大阪大学図書館報 1983. 1 V. 16 特別号
- 11) 徳田洋一 学術情報システム構想と大学図書館 旭川医科大学附属図書館 図書館月報 1983. 1 V. 4, N. 9 p. 1—5
- 12) 国立大学図書館協議会図書館機械化調査研究班編 大学図書館の機械化紀伊国屋書店 p. 1—3
- 13) 山本毅雄 図書館情報大学の情報システム 大学図書館研究 1981. 11 N. 19 p. 11—17
- 14) 図書館業務機械化検討ワーキング・グループ 図書館情報大学附属図書館における業務の機械化(1)——貸出・返却システム—— 大学図書館研究 1983. 5 N. 22 p. 86—94
- 15) 石川亮他 TULIPS の概要とその基盤としての DBMS 大学図書館研究 1982. 5 N. 20 p. 36—48
- 16) 早瀬均 TULIPS オンライン蔵書検索システムについて 大学図書館研究 1983. 5 N. 22 p. 75—85
- 17) 名古屋大学附属図書館 名古屋大学附属図書館業務電算処理システム報告書 1983 166p.
- 18) *ibid.* p. 162
- 19) 二宮純恭他 図書館トータルシステムの電算化について：北部九州地区国立6大学図書館ネットワークシステム中間報告 大学図書館研究 1982. 5 N. 20 p. 22—35
- 20) 九州大学附属図書館 図書館情報 V. 17, V. 18
- 21) 北川恵一 KIT-LC の総合機械化システムの概要 丸善ライブラリーニュース 1982 N. 123 p. VI—VII
- 22) 小田泰正他 JAPAN/MARC の利用システムとその問題点 情報管理 1983. 1 V. 34, N. 4
- 23) 村上英男 図書館業務の電算化について——大阪工業大学中央図書館・摂南大学図書館のオンライン私立大学図書館協会会報 1983. 4 N. 79 p. 57—70

IFLA 余滴

渋川 雅俊

8月21日から27日までミュンヘンで開かれた国際図書館会議 (International Federation of Library Associations and Institutions 49th Council and General Conference) に大江情報センター所長と参加しました。この会議 (以下IFLA会議) は毎年1回世界のどこかの都市で開催されています。昨年はトロントで開かれ、来年はケニアのナイロビ、その翌年がニューヨークで、三年後の1986年8月には東京でこの会議が開かれる予定です。

今度のIFLA大会には、73ヶ国からおおよそ1,200名のライブラリアンが参加しています。日本からも47名がミュンヘンに出かけました。参加者について、まず気が付いたことは、いわゆる第三世界から多くのライブラリアンが来ていたことです。それぞれの国がそれ程多くの代表団を送っているわけではないのですが、数えてみると、アフリカだけでも来年の開催国であるケニアを初め、17ヶ国ありました。

先進諸国での図書館は、一つの必要な社会機関としてそれぞれの国の社会に定着しており、そこでの今日の問題は、ひとびとの多種多様な生活様式を反映した情報要求に図書館がどう対応するかです。そうした要求は、コンピュータとコミュニケーションの技術革新によって、多様な情報チャンネルを作り出す基盤となっており、また、書物以外の多様な情報メディアを生み出す原因となっています。米国やヨーロッパ、そして日本などの図書館では、情報と言うモノに関する社会環境が著しく変化している中で、図書館サービスが今後どのように発達の方角を見定めて行くべきかが関心の中心になっています。

一方、発展途上にある国々の図書館は、それらの国々の歴史的背景をいささか調べるまでもなく、社会機構の中にしっかりと根を下ろしているとは考えら

れません。図書館サービス以前の問題として、文盲、教育の普及、出版活動などが大きな問題となっています。したがって、これらの国々では文化政策自体が基本的な課題となっているわけで、先進国の図書館と次元の異なる問題を抱えているものと見なければなりません。

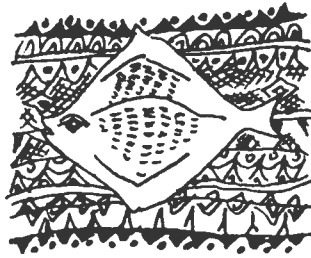
このような違和感は、今回のIFLA会議の統一テーマである『機械技術時代の図書館——図書館における技術革新の重要性』を前にして一層際立っているように感じられました。このテーマの下で、「南北問題」の目標が以下のように掲げられていましたが、それはなんとも白々しく聞こえました。曰く、

「図書館の機械化が遅れている国々の図書館は適切な機械技術の導入を計ることが望まれる。そのためにも、簡便な手段、方法を用いて図書館の自動化への方向に多くの期待が持てるように幾つかのモデルが開発されなければならない」 Universal Bibliographic Control (書誌情報の世界的収集と管理)、そのためと、そのように集中された記録情報の利用のための Net Working、そのネットワークを作りあげるための国際的図書館協力、そしてこ

の一連の構想を実現するためのコンピュータとコミュニケーション・テクノロジーの開発が大事なことであることには違いないのですが、Book for All、そして図書館サービスが誰でも享受できることを根本原理に考えると、全世界の図書館大会としては、機械化どころか、図書館も満足にない国々の問題に対する配慮も必要であると思われます。

こうした感想は、私たちだけではなく、今度のミュンヘン大会に参加した多くのひとびとも持ったものと思われ、大学図書館部会では、部会の始まった最初の日に、第三世界の図書館の諸問題を検討する懇親会が急遽開かれることになりました。この問題は来年のナイロビ大会を契機にさらに掘り下げられるものと期待されます。

(研究教育情報センター本部事務室)



BDS (Book Detection System) と インベントリー

加藤好郎
(三田情報センター閲覧課)

I 旧館時代と新館体制の相違点



旧館当時、学部学生が閲覧できる図書は、図書館図書に限られていた。目録は、和書では図書館図書の書名目録、著者名目録、分類目録、洋書では著者名目録、分類目録だけであった。つまり学部学生は、研究室図書そのものにアクセスできないどころか、その存在すら知る事ができなかったのである。又、昭和36年にNDCで分類を始める以前の図書、所謂、旧分類図書にも直接アクセスすることができず、出納を申し込まなければならなかった。現在、新館では文学部と法学部の図書、旧館では入館の際に入庫申請票に記入し、経済学部と商学部の図書と旧分類図書に直接アクセスできるようになり一部の出納(全蔵書の1%弱)を残し全館オープンとなった。又、旧館時代には入庫の際学生証を提出し荷物をロッカーに預けなければならなかったが、新館体制になってからは、入庫の際のチェックも一部の資料(法律学科図書、雑誌のバックナンバー、和装本)を残してなくなった。

II 開架式の利点

欧米の図書館では常識となっている開架式書庫も、日本の大学図書館ではまだまだ普及していない。開架式にすることによって、書架上の乱れ、及び図書の紛失が増える可能性が高く、開架式は図書館側からみると出納等の手間が省けるが、一方では管理面での煩わしさが増す様に思われる。しかしながら、利用者にとっての利点を考えてみ

ると次の様な事が言えるであろう。開架式の最大の利点は、“ブラウズイング”である。現在、NDCを使用して主題による資料組織を行なっているので、開架方式をとった(昭和36年)以降の図書館図書に対しては、目録“とブラウズイング”の両面で資料へのアクセスを利用者に可能にしている。新館オープンと同時に行なった利用者へのアンケート調査結果でも開架式の利点を裏付ける事ができる。“前の図書館とくらべて使い易い”の質問に対して、75%の学生が、“そう思う”と答えており、“書庫に自由に出入りでき読みたい図書を自由に探せて便利である”の質問に対しても、約75%が“そう思う”と答えている。又、開架式が利用者に与える利点については、以前、行なった“利用者から見た図書館の評価—Orrの評価方法に基づいて”の結果をみても、開架率が高い図書館の方が評価も高いという結果がでてい

この方法は、利用者の資料入手のスピードで図書館を評価するもので、いくつかのテストサンプル(ある主題の書誌)を作成し、個々のサンプルを実際に利用者が入手するまでの時間を測るものである。資料入手時間のカテゴリーとしては、①10分以内、②10分以上、2時間以内、③2時間以上、24時間以内、④24時間以上、1週間以内、⑤1週間以上、の5段階に分けている、そして、個々のサンプルについて計算し、サンプル数で平均し各館の評価を行なうものである。出納式(閉架書庫)の場合は、申し込んでから現物を手に取るまで10分以上かかってしまう場合が多い。開架式の場合不慣れな利用者でも10分以内でほとんど入手できるし、慣れれば入手時間は短縮されるのである。従って利用者からみて図書館を評価する際、開架か閉架は評価の要因となるであろう。以上の、アンケートや調査から判断すると開架式にする事は利用者の希望する事であり、実際サービスの向上につながっているとと言えるであろう。

III BDSの導入

一方、開架式にすることによる危険性も忘れて

はならない。前述の様に、書架の乱れ、図書の紛失の他に、図書の破損、所在調査の困難さ（館内閲覧か、配架ミスか、欠本か、等）である。これらの中で最も心配されるのが館外への図書の無断持出しである。その事を防ぐ為に、全館オープン図書の唯一のチェック・ポイントとしてBDS（無断帯出防止装置）を新館オープン（昭和57年4月）と同時に導入した。利用者の反応をアンケート調査結果でみると、“玄関のブックディテクション・システムの機械は出入りのときわずらわしい”の質問に対して、約60%が、“そう思わない”と答えている。後の40%の利用者には、サービスを向上するうえでの必要最低限のワン・ポイント・チェックである事を理解して頂きたいと思う。

IV インベントリー結果

下記の表は、インベントリー結果を表わしているが、BDSは57年に導入している。

		年 度		
欠本数		55年度	56年度	57年度
欠本	図書館（和書）	248 冊	316 冊	279 冊
	図書館（洋書）	79 冊	295 冊	167 冊
戻本	図書館（和書）	111 冊	153 冊	166 冊
	図書館（洋書）	42 冊	52 冊	99 冊
差引	図書館（和書）	137 冊	163 冊	113 冊
	図書館（洋書）	37 冊	243 冊	68 冊

56年度に欠本数が増加している原因としては、新館への移転後、オープンまでの非常に限られた時間しかなかった為に、全館のシェルフ・リーディングができなかった点、又、限られた範囲でインベントリーが行なわれた為と考えられる。55年度は、旧館時代のごく普通の状態で行なわれた結果なので、57年度と比較するのは55年度が好ましいと思われる。57年度は、55年度よりは欠本数が増加しているが、差引では減少している。この結果から単純に判断すると、荷物のチェックより、BDSの方が図書の紛失防止には効果があったと

言えるかもしれない。一度の結果ですべてを判断する事はできないが、この結果において初めて新しいサービスが成功したと言えるであろう。BDSそのものの機能や、その抑止力や、学生を中心とした利用者の大部分が、図書館の意図したところを理解してくれた結果とも考える事ができる。しかし、BDSでのトラブルが無かったわけではない。BDSが反応するうち、8割強が傘によるもので、最近では閲覧課のスタッフも慣れてきたが、当初は混乱を招いた。又、貸出手続きの際、あまりの忙しさの為に図書館側にミスが生じたり、利用者がうっかり持ち出そうとしたものなのか、故意に持ち出そうとしたものなのかの判断に迷ったりした事もあった。昨年度は、BDSが反応した際に、その利用者には口頭で注意を与え、正規の貸出手続きをとらせ特別の処置は講じていなかったが、今年度からは理由の如何んにかかわらず始末書を書かせる事にしている。同一人物が何枚もの始末書を書かない事を祈っているが、もしそのような事態が生じれば、来年度その処置についても考えねばならないであろう。

V 最後に

これからもインベントリー結果を注意深くみてゆく必要があるが、サービス向上（全館オープン）→ワン・ポイントチェック（BDS導入）→インベントリー結果（欠本数の減少）から判断して、新館のサービス体制は成功したと思える。

ところで、最近、数回教員の方が特別図書を選書課でもらい持ち出そうとすると、出口で“ピーピー”と反応する事があった。この原因を調べてみると、最近アメリカの書店では、盗難防止の為に商品に“タトル”を入れているとの話である。何かの手違いで、そのままの状態に日本に送られてきて図書館の出口で反応したものと思われる。書店以外でも、レコード店やカセット・テープを扱っているお店等でも“タトル”が入っているお店が多くなっているらしい。この様な珍事が現にあったので、その点御理解頂きたい。

指定出版社による一括購入方式のその後

石黒 敦子
(三田情報センター整理課)

1. 和書収集の推移

三田情報センターには国内新刊書に関して、学術的価値が認められるものについては、少なくとも必ず一点は購入するという収書方針がある。従来図書の収集は、見はからいの選定と注文票起票による注文（継続注文の単発注文）の二方式ののっていたが、この方式では、網羅的に収集するのは難しい。特に現在の見はからいの方式は、すべて業者に頼っており、選書課の見はからい展示架に並ぶ前に、業者による選書がなされているともいえよう。

学術図書の収集洩れを懸念して、昭和50年の購入率の調査を皮切り、に昭56和年には“和書の適及的補充”の第一回調査が行なわれた。この調査は『三色旗』（昭和49年11月号～55年12月号）に連載された“塾生書架”を調査材料とした。この記事は各専攻の教員が、その主題の研究するための手引きとして書いているもので、豊富な基本文献も紹介してある。調査では、69主題、約4500点のうち、洋書・継続図書を除く1,427点を対象とした。図書館の蔵書に収集されているか調べた結果、708点（49.6%）が未収集であることがわかった。（但し、このうち学部図書として収集されているものはかなり多い）。

この調査結果と合わせて、国会カード等を用いて、最近10年間に収集しそこねたと思われる約4,000冊の学術図書を追加購入した。だがこうした適及的な注文では、すでに絶版・品切となり入手が困難となっている出版物も多く、やはり刊行時に確実に収集していく手だてを考えていく必要があった。業者まかせの見はからいによる選定と、教員・選定委員から出る注文だけでは、和書コレクションの充実ははかりにくい。三田情報センターでは、より積極的な収書計画をたてていく

必要にせまられていると思われる。一括購入方式は、和書収集の改善案として考案された。

2. 一括購入方式とは

簡単にこの方式の原則を説明すると、一定の指定された出版社の新刊書は、定められた除外対象以外はその出版の度ごとに必ず一点納品され、三田情報センターは、これを確定注文品として扱い原則として返本せずに購入する。ということになる。これは、斎藤書房と栗田出版販売株式会社の協力をもとに行なわれている。

実行にあたっては、昭和56年に、昭和55年1月に出版された新刊点数調査などをデータとし、対象とする指定出版社をしぼる作業を開始した。当初39社の候補出版社を設定し、各社の新刊案内等を検討した上、最終的に現在の24社にしぼって、昭和57年8月にスタートした。

指定出版社24社

角川書店	東海大学出版会
岩波書店	みすず書房
新潮社	御茶の水書房
有斐閣	弘文堂
筑摩書房	早稲田大学出版部
平凡社	青林書院新社
東京大学出版会	商事法務研究会
東洋経済新報社	理想社
三省堂	研究社
白水社	大修館
吉川弘文館	紀伊国屋
法政大学出版局	創文社

* 除外対象出版物

- 全集・選集以外の一人の文学者の一つの文学作品
- 学術的とは認めがたい写真集・図版
- 実務書・実用書・学習参考書
- 文庫及び新書（岩波文庫・岩波新書・有斐閣新書・文庫クセジュ・東洋文庫・紀伊国屋新書はここに含めない）
- 研究書以外の児童図書

・雑誌・AV資料

上記の他、各社ごとに除外例を定めてある。

たとえば、平凡社：平凡社カラー新書、趣味・家庭、白水社：シートボックス、カセットボックス等。

1981年版の出版年鑑によると、昭和55年の新刊書は27,891点に達するが、そのうちこの24社の刊行物は2,742点、9.8%を占めている、27,891点という数字は、三田情報センターの収集対象外のものも含んでおり、和書コレクションに加えない学術図書はこのうちの何分の一かになろう。また、20点以上新刊書を刊行した出版社は310社あり、24社は7.7%にあたる。

これらに該当する図書が出版されると、指定図書と書かれた作業メモがはさまれて選書課に納品される。その後整理課受入係へ回り、見はからい選定と同様の受入手続をとられる。その際、除外対象となるものを再度ふるいにかけ、返本する。開始時はこの返本が多く、実務書、実用語学書が特に目立った。何か月か業者と話し合いながら、試行錯誤した結果、最近では納品されるものに殆ど問題はなくなっている。発足後一年を経て、漸く順調に動き出したようである。

この方式は、三田情報センターの会計年度を単位として、1年ごとに前年度の納入状況を点検し協議を行なった上継続することになっている。昨年は8月という中途の時期に始めたことでもあり、又、初年度で試行的な期間でもあって、特に検討は行なわれていない。

3. 今後の展望と課題

一括購入方式は、学術図書の主な出版社の出版物を網羅的に購入することにより、少なくとも新刊書の約1割は確実に収集可能であるというのが最大の利点であろう。その際気になるのは、はたして納品洩れなく確実に納入されているだろうかという、納品率の問題である。だがこの点は確めにくい。昨年1年間に、24社が何を刊行したかを網羅するリストは手に入れにくいであろう。各出

版社の刊行案内は、まちまちな形態・収録幅であろうし、出版年鑑等を用いるにしても、出版社名からのリストを作成するのは手間がかかりすぎ、タイムラグも生じる。最も重要な点が、同時に最も評価を下しにくい点になっている。

指定出版社の一括購入という言葉からは、その出版社の出版物はすべてこの方式によってのみ購入するような誤解を招きやすい。しかし、現在は教員からの推薦・注文があれば、指定図書に該当するものであれ、通常処理をされ重複調査に回る。他の業者の見はからいも、選定されれば同様に処理される。一般に指定図書の納品は他の見はからいより迅速に行なわれるため、このような処理をしていても重複による返本を出す可能性は少なく、必ず一点購入するという原則をくずすことはない。指定出版社24社を考慮して行なっているのは、館内の選定委員が回覧される出版情報書誌から選書する場合に限られる。

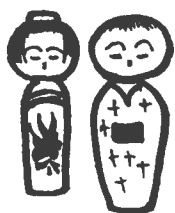
一括購入方式を、新刊書の収集洩れを防ぐための一手段と受け止めれば、かなり有効な方法であると思われる。ところが一方、上述のように、指定出版社の図書といえども、通常の見はからい、注文からしめ出すわけではないので、発注・受入作業は決して省力化されてはいない。むしろ増加しているともいえよう。そのあたりから、一括購入の在り方に疑問の声もあるようだ。指定出版社の数を増やし、除外対象を明確にして、より完全な一括購入制度を作りあげられれば、新刊書収集の中心となるシステムになり、通常の見はからいや注文から指定出版社の刊行物を除外することができるのではないか、という声も聞かれる。指定出版社は初年度は、総合出版社を主に選んであり、今後特定出題の専門出版社を加えていくこともできよう。又、除外対象も確かに新たな基準を設けていくことも必要であろう。しかし、指定出版社の数を増すことにより、業者の眼が行き届かなくなるとは逆効果であるし、除外対象も規定を厳密にするとボーダーラインに位置する図書が、納品以前によけられてしまうような危惧もある。

今後和書購入計画の中で、この制度はどのように位置づけられていくべきであろうか。現行の種々の収集方法の最後の洩れを拾う網として考えてよいものか、新刊書収集の中心軸となりうるものか、業者とも話し合いを重ね、慎重に検討し、和書コレクションの充実を計っていききたいものだ。

目録利用案内

高谷 康子

(三田情報センター整理課)



昨年四月、新館開館と同時に七十数年の歴史を経てそれまで旧館や研究室棟の各フロアに変則的に分散していた三田の目録が一ヶ所にまとめられた。

二百万枚を越えるカードが収められた三十六箱の目録ボックスが整然と九列に並んでいる目録ホールの中程の位置、目録ボックスに向い合せて「目録案内」デスクが設置された。この目録の傍らのデスクでは専門の係員が目録の利用に関して質問や疑問に答えたり又援助したりアドバイスをしたりする。このような形で目録利用の為のサービスの向上を計っている例はアメリカの大学図書館を見学した際散見されたが、我が国においては余り例がないと思われる。「目録案内」デスクを開設して一年たったので経過や今後の問題を含め感想を述べてみたい。

目録は図書館を有効に利用する上で最も重要な道具の一つであり、特にシステムティックに所蔵資料を掘り起こす為の何にも代えがたい鍵である。目録の利用指導はある程度機能の分化している図書館においてはレファレンス係が受け持って

いる。新図書館では構造上レファレンスカウンターとカードボックスが同一フロアではあるが遠く離れて位置することになった。新図書館になって一ヶ所にまとめられた目録はその体系においても旧来の複雑さを解消すべく和漢書と洋書別の著者名、書名、分類の目録各一本づつという体裁に整えられたが、一旦細部に目を落として見るとそこにはこれら目録の歴史の古さからくる。様々の不統一が目につく。こうした不統一が目録記入へのアクセスに及ぼす影響の度合も又様々である。「目録案内」にはこうした目録の歴史の延長線上において日々の仕事を進めている整理課のスタッフが交替であたることでスタートした。

整理課にとってはパブリックのスペースで利用者と直接に接する窓口を持つということは初めての試みである上に当初は新館開館直後の慌しい状況のもとにあり新しいサービスを始める意気込みはあったが「目録案内」の位置付けや性格付け、そしてその内容の十分な検討の余裕のないまま開始となった。整理課が恒常的に抱えている業務量と「目録案内」に割り当てる時間、又その時間量と効果との兼合い等の問題があったが経験を積んでいく上で考えることにした。デスク開設時間に関しては目録利用のピークを見計り次のように絞っていった。一日のうちでも午後の二時半過ぎ、これは授業の三時限目の終了時にあたる、を中心に前後一時間半とした。一週間のうち月曜日から金曜日までとし土曜日ははずした。時期的みると試験期には通常より目録は頻繁に利用される。次の表でも明らかなようにデスクに足を運んだ利用者は圧倒的に学生が多い。よって閉講期間中は、夏期の通信教育のスクーリング期間を除いては、「目録案内」デスクは閉めることにした。デスクに座った者は利用者の質問内容をメモし受付けた件数を記録した。統計は目録の内容に関わる質問とその他のもの、例えば単なる場所指示等とに分けてとることにした。以下にこの一年間にデスクで受け付けた質問の件数を示す。

57年度「目録案内」受付質問件数

	学生	教職員	その他	計
目録の内容に関する質問	465件	30	21	516
場所指示等	516件	28	18	562

総計 1,078件

57年度「目録案内」実施期日

57. 5月13日～7月21日：50日
 8月13日～8月25日：11日
 9月22日～12月17日：59日
58. 1月11日～2月4日：19日 計 139日
- 1,078件
 139日 = 7.8件/日

昨年度の一日一時間半の平均受付件数は八件弱でありうち目録の内容に関するものは四件弱である。場所指示等がこれを若干上回っている。場所指示に関しては『請求記号の略号と図書配置』一覧表が既に用意されており、又目立つ位置に掲示版等で表示する等の改善を計ればこうした面での援助の必要はある程度は減じるかと思われる。尤も同じ資料でも配置場所によって貸出し条件が異るとか、又請求記号自身も長い図書館の歴史のうちには様々な変遷があり一覧表には簡明には表現され得ないものもあり人的援助は欠かせない。

目録の内容に関する質問では、目録とは何かといった極めて初歩的なものから目録規則を熟知していればよりの確かな検索が可能な例、たとえばジェファーソンの独立宣言文が見たいという利用者に対しては、洋書著者名目録で United States Declaration of independence をひきオリジナルの複製版や関係資料を探して回答するといった種類のものもある。勿論、目録では Jefferson, Thomas から探せるようになっているが。質問の範囲は目録のあらゆる面に渡り、カード目録の収録範囲、記述部分の記載事項、請求記号法に関するもの、アクセスポイントの形や範囲、そして排列規則等々であるが、最も多かったものは既知の人名又は書名による検索と特定主題についての検索法であった。既知の人名による検索では西洋の翻訳書に関するものが多く、翻訳書が和漢書か洋

書のいずれの目録に収録されているのか、人名の綴りは何によるのか等は利用者にとって不明瞭な点であるようだ。又、人名の原綴りの確認が必要な場合が多々あり、かなから原綴りへの索引や人名辞典が不可欠だ。主題からの検索、即ち分類目録に関しては学生による和漢書目録の刊用が多い。分類目録利用の為にNDC 8版を目録ボックス上に備えてあるが実は二年前にNDC 7版から8版への切り換えが行なわれていながら分類番号の変更によるコンフリクトの訂正に手が付けられていない。一貫性を旨とする資料組織の原則が破られ本来の機能を損っている分類目録はサービスを云々する以前の問題を抱えている。又、分類番号は一般には馴染みにくい。言葉から番号への索引の整備も望まれる。資料は階層的な構造を持っている分類表中の最もスペシフィックな主題を表わす番号のもとに分類される。よって分類目録を検索する場合もこの点を念頭に置き、まずスペシフィックな分類番号を、そしてそこに適当な資料が見い出せなければより上位の番号をたどって探す必要がある。又関連主題にあたるなどのテクニックも必要だ。冒頭で目録の中味の不統一について触れたが、それらはさらに目録の収録範囲や検索の手がかりの範囲が様でないことにもある。多巻物の各巻の書名は長い間二次的に扱われていたし、人名や団体名の件名のアクセスポイントが全面的に用意されるようになったのも比較的最近のことである。洋書のモノグラフィックシリーズ名へのアクセスは非常に限られているし多巻物の内容細目をオープン記入で簡略化してきた。和漢書の叢書名の範囲も一定していなかった。洋書の書名目録は作成中であるので現時点では著者名目録が完全であるが書名目録が完成したとしてもある時期の総称的な書名は欠落したままという事態は残る。和漢書の場合は書名目録がより完全である。こうした事情のもとでの目録の検索は、例えば件名で捜せなくても分類目録にあたりとか、個々の書名で見い出せなくてもそれがいずれかの叢書に収録されているかどうかなど確認する必要が

ある。カード目録が収録していない古い時代の資料に対しては冊子体の目録がある。分類目録は昭和37年以降受入の資料を収録しているに過ぎない。著書名、書名、分類の各目録中書名目録が最新の情報を提供する。注文中や整理中の資料はカード目録ではアクセス出来ない。逐次刊行物やその他の資料課管理の資料、ロシア語資料等はそれぞれ3階や4階、レファレンスで維持している目録の方が完全である。目録は図書館資料にアクセスする上で重要な手がかりではあるが全てではない。雑誌論文やマイクロ資料の細目、ECやOEC D出版物のある時期以降のもの、教養図書コレクションや児童書コレクション等々は目録に収録されていない。さらに目録をひいて求める資料が見い出せなくてもレファレンスでの調査、相互貸借、購入希望図書受付のサービスがある。又、出版された文献を系統的に洗い出す為にはレファレンス・サービスに依らなければならない。「目録案内」デスクに座る者は目録についてのみならず図書館サービス全般に留意し目録ホールの目録で何が出来、何が出来ないかを十分に把握しておいて、初めて利用者の為に的確で無駄のない検索の援助が出来るという事になる。勿論、和漢書、洋書別の目録規則や配列規則、そして分類表やその運用コードが基礎知識として必要な事は言うに及ばないが、和洋の目録規則の違いは例えば毛沢東は和漢書では“Mo, Takuto,” 洋書では“Mao, Tse-tung”でありOECDは“経済協力開発機構”と“Organization for Economic Cooperation and Development”との違いなる。又目録規則自体が時代の要請に応じて改訂されていき、それらを採用した時点でも全面的採用とはいかないので古い形のものも残っていくことになる。

現行の規則については“図書館利用案内シリーズ”で概略の説明が準備されているが、これとて個々の利用者のスペシフィックな問題の解決に即役立つということはほとんど期待出来ない。本来目録は利用者にとって単純明快である事が望ましいが、本図書館のように歴史が古く所蔵資料も多

いところでは複雑化は避けられない。「目録案内」がその複雑さをカバーするという意味において、又個々のケースをとらえて目録利用のハウツウが説明出来るという意味において有用であるのは言うまでもない事であろう。がより積極的な意味を次のように考える。多大の時間と労力をかけて作られた目録という製品をいかに有効に使うかという事が整理課のスタッフの最大の関心事であるのだが、そのような姿勢で「目録案内」に臨むことによって利用者が目録利用のどういった点に困難を感ずるのかを理解し、その解決策を検討しさらによりよい製品を生み出す為のフィードバックとする事である。今までも整理作業は利用性を念頭に置いて行なわれてきたが、直接利用者と接する機会が皆無に近かったのでそこの利用者感覚は机上のものに陥る危険性があった。又、当今コンピュータ化の波が押し寄せ整理作業もかつてない程大幅な変更を迫られている。目録自身も根本的にその性格を問い直されている時期でもあり利用者の立場に立った目録とはどうあるべきか一層の検討が要求されている。アメリカ等では目録利用研究が盛んに行なわれており興味深い結果も出ている。「目録案内」はこれらの成果もふまえ、例えば利用者対応技術の改善に反映させるなどもう少し組織的な対応をというのが今後の課題であろう。整理課スタッフの経験年数や守備範囲も一様ではない。積極的なアピールの方法も考える必要がある。開設時間は適当であろうか。いろいろ問題はあるが新しい試みの意味を考え大事に育てていきたい。

原風景としての図書館

伊藤 行雄

午睡を誘うにはあまりに微茫な11月の午後の陽光は、旧市街の濃密な家並みに驚りを彫り込みながら、その掌の温りを路地裏の暗がりまで伝えようとするけれど、アルプスから吹きおろす初冬のつめたい風に阻まれて、石畳に転がる葉巻の吸殻とともに、建物の裂け目のようなシュピーゲル路地の奥に掻き消されてしまう。レーニンが亡命中下宿していたこの隙間のような狭い路地から、ダダイズムゆかりのカフェ・ヴォルテール跡の建物を右手に折れると、商業都市チューリヒを忘れさせてくれるニードルフ界限がアーレ川に平行するように北へ向ってのびている。バー、キャバレー、大衆レストラン、娯楽場、映画館、ブチックのショーウィンドーに寄りかかる若い姉妹、頭上の窓から落ちてくる奇声、石鹸の匂いなど、私が2年間通った中央図書館はこうした生活の臭いの漂う人間らしい旧市街の一角に位置していた。

この図書館は大学図書館も兼ねているので休み時間を利用してやってくる学生や市民でいつも混んでいたけれど、カードを調べればチューリヒ中の主な研究所やアルヒーフの資料の所在がわかるばかりでなく、スイス国内ひいてはヨーロッパ各地から必要な資料を取り寄せるシステムが完備していたため、私は大学の授業のないときはよくこのカタログルームや閲覧室で時を過ごした。資料がみつかりと市電に乗って数日別のアルヒーフに通ったこともある。古い街並みの簡素な造りの閲覧室で他人の頁を捲る音を聴いていると、まるで知の胎内の闇に戻ったような妙な安堵感に囚われた。

チューリヒ大学とアインシュタインなどで有名なチューリヒ工科大学は中央図書館から山の手急斜面を息せき切ったのぼったところに並んで街を見おろすようにたっている。工科大学のテラスからは旧市街に突きでたいくつもの教会の尖塔やあかい屋根屋根、その向うには有力な銀行が犄めき合うパンホーフ通り附近の近代的な建物の頭の部分がみえ、遠くにはグラールスあたりのアルプスの白い峰々が望める眺めのよいところだ。この工科大学の建物の

天辺の穹窿の屋根の下にも図書館があり、中央図書館が満席だったり、授業の合い間で時間のないときはこの図書館をよく利用した。といっても工科大学には縁がないので当初は場所だけ借りるつもりだったのだが、よく調べてみるとけっこう私の研究テーマ(リルケ)に必要な本があることがわかった。この大学の第12部門は精神科学で文科系のユニークな教授連がスタッフとして揃っているところはさしづめ日本の教養課程を思わせる。この図書館はすべてがコンピューター化され、私もいつもコンピューターカードを機械に入れキーをたたいて本を借り出していた。明るいコンピュータールームで数十枚の目録カードを一度に調べることができるマイクロフィルムをリーダーにかけたあと数字を機械に打ち込めば、15分後に本を借り出すことができるか、現在借出中で何日後に予約されるかが館員の手を煩わさなくてもすぐ確められるシステムは、中央図書館にはない、いかにも工科大学らしい合理化されたシステムであった。

図書館は大学においては大学の顔であり、都市においては知の中核でなければならない。私にとってこの二つの図書館は、その性格は異にしていたけれども私の留学を保証してくれた光と闇の部分であり、そこには都市チューリヒに顕われた二面性も反映しているといえよう。勿論このばあい闇が光を支えるのではなく両方が相互に補填し合う関係が前提となることはいうまでもない。

図書館の書庫にはエロチックな雰囲気がある、といえれば考えすぎといわれるかもしれないが、図書館は知へのエロスの衝動を生成する磁場であると同時にそのエネルギーを提供する滋養が育まれる場の素地でもあり、そのばあい空間は「見せる」というような荒唐無稽な高等な頭脳の遊戯の対象ではなく、あくまでも「利用する」立場から考えた知への挑発意識を高めるエネルギーを燃焼し、させる場であればよいわけだ。もっともフロイト的にいえば、エロスの衝動は破壊衝動にうらうちされているわけだが、旧いものを壊し新たな知の大系を索めるといふ、いわば解体と構築の円環運動を考えると、図書館は知の母胎としての機能をじゅうぶんに発揮できる生成の可能性を秘めた場であることがなによりも大切ではないか、と私は考えている。(経済学部助教授)

インベントリー雑感

玉井 裕子

インベントリー（蔵書点検）実施までのここ1、2ヶ月は目録係にとって多忙な毎日であった。医学情報センターにおける単行本の受入れ冊数は1979年度から飛躍的に増加し、その傾向は現在も続いている。係のマンパワーは今まで通りであるから、必然的に1日の中で処理すべき冊数は増えていく。今年度はじめの4月には、受入れられた本が書架に入りきらず、ブックトラックの上に置かれたり、揚句の果てには床の上に平積みされている有様だった。この滞貨を何とかして解消しなければと思い、4月5月6月と精力的に目録をとっていった。その成果が徐々にではあるが現われ、まず床の本が消え、続いてブックトラックの本が消え、やれやれと思っていた矢先に単行本のインベントリー実施が7月下旬に正式に決まったのである。ところがこの時期、インベントリーの準備に加えてルーティンワーク以外の仕事が幾つか集中した。日本医学図書館協会が編集発行している「医学洋書総合目録」のワークシート作成や、WHOの派遣により(財)国際医学情報センターで研修中の中国人研究員への業務紹介と実習、「学術雑誌総合目録和文編」の改訂への準備などがそれである。

こうした状況の中でとにかく実施予定日に向けてインベントリーの準備はしておかなければならない。インベントリーは現物と事務用カードの照合作業であるから、事務用カードがきちんと整備されていることが作業の大前提である。ところが限られた人力の中では自ずと目録作業に重点が置かれ、目録カードの作成・配列は後まわしになりがちである。こうしてたまりにたまった約3,000冊分のカードを1ヶ月半のうちに作成し、インベントリーに備えなければならない。もちろん、1冊の本につき1枚の事務用カードのみを作成すればいいのであるが、作

業の工程上、閲覧用カードも複製しておく必要がある。1冊について平均5枚のカードを作るとしても、1万枚を遙かに超えるカードが複写されていく。一時期に大量の複写をするためか、U-Bixのカード複写機の調子が悪くなる。私達スタッフも、増え続けていく滞貨図書をまのあたりにしながら、来る日も来る日も目録カードばかり眺めなければならず焦燥感にさいなまれる。「こうしている間に何冊目録がとれるだろうか」などという考えが、しばしば頭をかすめる。折しも梅雨時のうとうとしさがそれに拍車をかけ、いやが上にもいらだちが募る。が、ともかくこうして全てのカードができあがり、ファイルされ、さらにミスファイルがないかどうかチェックされ準備は整った。

インベントリー作業は7月25、26の両日にわたって全館をあげて行なわれた。ここ4年間、毎年夏の恒例行事となっているため、館員もすっかり慣れていて作業はとどこおりなく進んだ。その結果、数十冊の紛失本が発見された。80年にブックディテクションシステムが導入されたにも拘らず、毎年のインベントリーで今回と同様の数の紛失本がでる。この現象が何

に起因しているのかは、また追々考えなければならないが、とにかくこれといった支障もなく、無事今年のインベントリーも終了し、私達目録係のスタッフはホッとしているところである。

インベントリー2日目の7月26日には関東地方の梅雨もあけ、やっと本当の夏がきたような気がする。

(医学情報センター資料サービス担当)



研究・教育情報センターに関する書誌 1982~1983.9

〔三 田〕

安西郁夫“慶應義塾大学三田情報センター”情報
図書館学研究センターニュース No.12, p.1-2
(1982).

“温かい抽象の世界—保田春彦展, 若林奮展—, 内部
風景のぞき込む窓”朝日新聞(昭和57年11月
7日夕刊)。

“勉強・読書にバツグンな環境—大学図書館紹介,
慶應大学図書館・新館”自由閲覧室(昭和57年
12月10日), p.4.

紀田順一郎“いま図書館にコンピュータはいらない”
季刊としょかん批評1号, p.85-86(1982).

Goody, Joan E. “A rare and rich response to
context”. *Architectural Record*, p.106-113
(May 1983).

“三田新図書館, 好評“充実した設備”, アンケー
ト調査の結果から”慶應塾生新聞 No.151, p.2.
(昭和57年10月10日)。

“人気なぜ? 新図書館”朝日新聞(昭和57年10月
5日朝刊), p.11.

“私大図書館新館ブーム—蔵書あふれてパンク—”
朝日新聞(昭和57年12月6日朝刊)。

“シンボルが化粧直し—慶大—”朝日新聞(昭和
57年11月9日朝刊), p.14.

“図書館が語る現代風『学問のススメ』”平凡パン
チ(昭和58年7月25日), p.100-101.

“図書館とその利用<座谈会>”出席者: 細野公
男 加藤好郎 磯宏美 司会: 高宮利行 三色
旗 第424号 p.9-20(1983.7).

“生まれ変わった知の泉—三田図書館新館利用ガ
イド—”慶應キャンパス(昭和58年5月5日),
p.2.

山本晶“新図書館をどう見るか”三色旗 No.419,

裏表紙裏(1983).

〔日 吉〕

衛藤駿“日吉新図書館の建設に向けて”慶應義塾
大学報 No.140, p.14(1983).

衛藤駿“日吉新図書館の構想—新しいキャンパス
の顔”三田評論 No.825, p.22-23(1982).

“日吉新図書館建設へ 125周年記念事業委発足”
慶應塾生新聞 No.146, p.1(昭和57年5月10
日)。

“日吉新図書館利用法”慶應キャンパス No.112
(昭和58年4月20日)。

“125周年記念事業 150億募金計画スタート—日
吉新図書館”六層から五層建てへ第二次設計案
出される—”慶應塾生新聞 No.150, p.1(昭
和57年9月10日)。

“125周年記念事業 長期的展望に欠ける具体案—
日吉新図書館・四谷新病棟当初の想像より縮少
早ければ来年八月着工—”慶應塾生新聞 No.
150, p.2(昭和57年9月10日)。

“慶應義塾創立百二十五周年 新日吉図書館と新山
中山荘”三田ジャーナル No.87, p.1(1983).

“構造上の問題が焦点へ 日吉新図書館建設委再
開”慶應塾生新聞 No.151, p.1(昭和57年10
月10日)。

洪川雅俊“慶應義塾図書館の開館と日吉新図書館
計画の決定”慶應義塾大学報 No.144, p.1
(1983).

柳屋良博“日吉の新図書館計画について”塾監局
紀要 No.10, p.20-29(1983).

“四階へ設計変更 日吉新図書館建設委員会開か
る”慶應塾生新聞 No.152, p.1(昭和57年11
月10日)。

〔医学〕

- “医学情報センター（北里記念医学図書館）—表紙説明” **Keio 病院ニュース** No.2, p.1-2 (1982).
 “医学情報センター（北里記念医学図書館）” 慶應義塾大学医学部六十周年記念誌 p.745-61(1983).

〔理工学〕

- 佐藤和貴 “慶應義塾大学理工学情報センターの現況” **大学図書館研究** No.22, p.134-39 (1983).

資料 II

図書館関係英語文献の和文抄訳リスト

研究・教育情報センターでは、これまで、スタッフ研修の一環として業務にかかわる英語の雑誌論文を選択し、日本語の抄訳を作成してきた。以下に掲げるのが、そのリストである。抄訳は職員によるもので適時センター内に回覧されている。

- Blood, Richard W. “Evaluation of online searches”. **RQ**, Vol.22, p.266-277 (1983).
 Bonk, Sharon C. “Integrating library and book trade automation”. **Information Technology and Libraries**, Vol.2, p.18-25 (1983).
 Bryant, Philip. “The Center for Catalogue Research”. **Library Resources & Technical Services**, Vol.27, p.142-143 (1983).
 Chan, G. K. L. “Use of a commercial computer bureau for catalogue production at Liverpool Polytechnic”. **Program**, Vol.17, p.39-51 (1983).
 Collver, Mitsuko. “Organization of serials work for manual and automated systems”. **Library Resources & Technical Services**, Vol.24, p.307-316 (1980).
 Corney, James F., Spalding, Helen H. and Fraser, Jeanmarie Lang. “Involving faculty and students in the selection of a catalog alternative”. **Journal of Academic Librarianship**, Vol.8, p.328-333 (1982).
 Crismond, Linda F. “Quality issues in retrospective conversion projects”. **Library Resources & Technical Services**, Vol.25, p.48-55 (1981).
 Crowe, William J. “Cataloging contributed to OCLC: a look one year later”. **Library Resources & Technical Services**, Vol.25, p.56-62 (1981).
 Dagold, Mary S. “The last frontier: possibilities for networking in the small academic library”. **Library Resources & Technical Services**, Vol.27, p.132-141 (1983).
 Dwyer, James R. “The effect of closed catalog on public access”. **Library Resources & Technical Services**, Vol.25, p.186-195(1981).
 Estabrook, Leigh. “The human dimension of the catalog: concepts and constraints in information seeking”. **Library Resources & Technical Services**, Vol.27, p.68-75 (1983).
 Euster, Joanne ed. “Reactions to the think tank recommendations”. **Journal of Academic Librarianship**, Vol.9, p.4-14 (1983).
 Graham, Peter S. “Technology and the online catalog”. **Library Resources & Technical Services**, Vol.27, p.18-36 (1983).

- Hewitt, Joe A. "The use of research". **Library Resources & Technical Services**, Vol. 27, p. 123-131 (1983).
- Hoadly, Irene B. and Payne, Leila. "Toward tomorrow: a retrospective conversion project". **Journal of Academic Librarianship**, Vol. 9, p. 138-141 (1983).
- Johnson, Judith J. and Josel, Clair S. "Quality control and the OCLC data base: a report on error reporting". **Library Resources & Technical Services**, Vol. 25, p. 40-47 (1981).
- Koel, Åke I. "Bibliographic control at the crossroads: do we get our money's work?". **Journal of Academic Librarianship**, Vol. 7, p. 220-222 (1981).
- Lancaster, F. W. "Future librarianship: preparing for an unconventional career". **Wilson Library Bulletin**, Vol. 57, p. 747-753 (1983).
- Lewis, D. E. and Robinson, M. E. "Computer based cataloguing at Loughborough University of Technology, 1968-1982: a review". **Program**, Vol. 17, p. 52-57 (1983).
- McDonald, David R. and Searing, Susan E. "Bibliographic instruction and the development of online catalogs". **College & Research Libraries**, Vol. 44, p. 5-11 (1983).
- Magnuson, Barbara. "Collection management: new technology, new decisions". **Wilson Library Bulletin**, Vol. 57, p. 736-741 (1983).
- Metz, Paul and Espley, John. "The availability of cataloging copy in the OCLC data base". **College & Research Libraries**, Vol. 41, p. 430-436 (1980).
- Moore, Barnara. "Patterns in the use of OCLC by academic library cataloging department". **Library Resources & Technical Services**, Vol. 25, p. 30-39 (1981).
- Mullikin, Angela G. "The King research project: design for a library catalog cost model". **Library Resources & Technical Services**, Vol. 25, p. 177-185 (1981).
- Munn, Robert F. "Collection development vs. resource sharing: the dilemma of the middle-level institutions". **Journal of Academic Librarianship**, Vol. 8, p. 352-353 (1982).
- Revill, D. H. "Charging for online services: the questions and arguments from an academic library". **Program**, Vol. 17, p. 58-67 (1983).
- Rice, James. "Library orientation: an assessment of student preference for method of library orientation". **Journal of Library Administration**, Vol. 4, p. 87-94 (1983).
- Ryans, Cynthia C. "Cataloging administrators' views on cataloging education". **Library Resources & Technical Services**, Vol. 24, p. 343-351 (1980).
- Salmon, Stephen R. "Planning for library automation: the origins of MELVYL". **Information Technology and Libraries**, Vol. 1, p. 350-358 (1982).
- Salmon, Stephen R. "Characteristics of online public catalogs". **Library Resources & Technical Services**, Vol. 27, p. 36-67 (1983).
- Seal, Alan. "Experiments with full and short entry catalogues: a study of library needs". **Library Resources & Technical Services**, Vol. 27, p. 144-155 (1983).
- Smith, Roger K. "1985: new technology for libraries". **Library Journal**, Vol. 105, p. 1473-1478 (1980).
- Spalding, H. H. "A computer produced book catalog with automatically generated indexes". **Library Resources & Technical Services**, Vol. 24, p. 352-360 (1980).
- Stenstrom, Patrica and McBride, Ruth B. "Serial use by social science faculty: a survey". **College & Research Libraries**, Vol. 40, p. 426-431 (1979).
- Stevens, Norman. "Library technology: the black box syndrome". **Wilson Library Bulletin**, Vol. 57, p. 475-480 (1983).

Stieg, Margaret F. "Continuing education and the reference librarian in the academic and research library". **Library Journal**, Vol. 105, p.2547-2551 (1980).

Ungarelli, Donald L. "The cost-benefit of a book detection system : a comparative study". In: Cher, Chin-Chin ed. *Quantitative mea-*

surement and dynamic library service, Oryx Press, p.149-169 (1978).

Wilson, Patrick. "The catalog as access mechanism: background and concepts". **Library Resources & Technical Services**, Vol. 27, p.4-17 (1983).

資料 III

スタッフによる論文発表・研究発表 1982~1983.9

〔論文発表〕

〔三 田〕

安西郁夫, 磯宏美 "慶應義塾大学における情報検索サービス" **私立大学図書館協会会報** No. 79 私立大学図書館協会第43回(昭和57年度)総大会記録 1983年4月 p.46-56.

安西郁夫 "第4回情報図書館学夏期シンポジウム 事例1: 慶應義塾大学三田情報センター" **情報図書館学研究センターニュース** No. 12, p.1-2 (1982).

安西郁夫 "講演「ジャパンマーカーその利用と問題点一」神奈川県図書館協会職員研修会(57年度第7回)" **同研修会報告集** 昭和57年度 p.24-33 (1983).

渋川雅俊 "コンピュータ・カタログへの展望" **大学図書館研究** No. 22, p.27-35 (1983).

渋川雅俊 "NDCによる法律図書分類の諸問題" **びぶろす** Vol. 34, No. 1, p.22-23 (1983).

渋川雅俊 "図書館サービスの原理" (津田良成編 **図書館情報学概論** 勁草書房 p.174-196 1983).

渋川雅俊 "図書と出版流通" (**図書館年鑑** 1983 日本図書館協会 p.253-256 1983).

渋川雅俊 "図書の評価と選択" (**図書館資料論** 古賀節子他共著, 樹林房 p.48-84 昭和58年)。

白石克 "既見「寺社略縁起類」目録編(江戸期刊小冊子)" **斯道文庫論集** No. 19 (1983).

長島敏樹(上田修一との共著) "JAPAN/MARCのUNI-MARCとの互換性およびタイム・ラグ" **Library and Information Science**, No. 20, p.117-127 (1982).

〔医 学〕

後藤敬治 "1983年度 MEDLINE ファイル索引作成" **医学図書館** Vol. 29, p.364-366 (1982).

後藤敬治 "1983年度 MEDLINE ファイル索引作成一補遺" **医学図書館** Vol. 29, p.367-368 (1982).

堀江幸司, 奥山智子(他) "第2回生物医学図書館員研究会報告—コンピュータによる冊子体図書目録作成の比較(東医・自治・杏林)—" **医学図書館** Vol. 30, p.64-72 (1983).

加藤孝明ほか "座談会 図書館の利用を阻む壁" **現代の図書館** Vol. 21, p.65-80 (1983).

松井朗 "資料紹介 Handbook of Medical Library Practice. 4th ed. Vol.1: Public Services in Health Science Libraries". **医学図書館** Vol. 30, p.214 (1983).

大沢充 "職場研修に期待して—医学情報センタ

- ” **KEIO 病院ニュース** No.16, p.9-10 (1983).
- 渡部満彦 “シリーズ「機械化を考える」(1): 目録の統計—機械化の進め方—” **きたさとニュース** No.53, p.1-2 (1982).
- 渡部満彦 “シリーズ「機械化を考える」(2): NCR, AACR 2, NLMC と ISBD (1)” **きたさとニュース** No.55, p.1-2 (1982).
- 渡部満彦 “シリーズ「機械化を考える」(3): NCR, AACR 2, NLMC と ISBD (2)” **きたさとニュース** No.56, p.1-2 (1982).
- 渡部満彦 “シリーズ「機械化を考える」(4): なぜ目録の機械化なのか? (1)” **きたさとニュース** No.57, p.1-2 (1982).
- 渡部満彦 “シリーズ「機械化を考える」(5): なぜ目録の機械化なのか? (2)” **きたさとニュース** No.58, p.1-2 (1982).
- 渡部満彦 “シリーズ「機械化を考える」(6): なぜ目録の機械化なのか? (3)” **きたさとニュース** No.59, p.1-3 (1982).
- 渡部満彦 “シリーズ「機械化を考える」(7): なぜ目録の機械化なのか? (4)” **きたさとニュース** No.60, p.1-3 (1982).
- 渡部満彦 “シリーズ「機械化を考える」(8): なぜ図書館は機械化なのか? (1)” **きたさとニュース** No.61, p.1-2 (1983).
- 渡部満彦 “シリーズ「機械化を考える」(9): なぜ図書館は機械化なのか? (2)” **きたさとニュース** No.62, p.1-2 (1983).
- 渡部満彦 “シリーズ「機械化を考える」(10): なぜ図書館は機械化なのか? (3)” **きたさとニュース** No.63, p.1-2 (1983).
- 渡部満彦 “シリーズ「機械化を考える」(11): なぜ図書館は機械化なのか? (4)” **きたさとニュース** No.64, p.1-2 (1983).
- 渡部満彦 “シリーズ「機械化を考える」(12): なぜ図書館は機械化なのか? (5)” **きたさとニュース** No.65, p.1-2 (1983).
- 渡部満彦 “シリーズ「機械化を考える」(終): 機械化の次は?” **きたさとニュース** No.67, p.1-2 (1983).
- 渡部満彦 “資料紹介 A History of the National Library of Medicine: the Nation's Treasury of Medical Knowledge”. **医学図書館** Vol.30, p.90-91 (1983).
- 渡部満彦 “書誌・索引類と図書館へのインパクト” **図書館雑誌** Vol.77, p.86-88 (1983).
- 渡部満彦 “図書館とコンピュータ(1): 機械化の実例” **医学図書館** Vol.29, p.122-134 (1982).
- 渡部満彦 “図書館とコンピュータ(2): ファイルの話” **医学図書館** Vol.29, p.392-404 (1982).
- 渡部満彦 “図書館とコンピュータ(3): コンピュータとプログラミング” **医学図書館** Vol.30, p.47-60 (1983).
- 渡部満彦 “図書館とコンピュータ(4): 機械化の進め方” **医学図書館** Vol.30, p.140-153 (1983).
- [日吉・理工学]
- 斎藤憲一郎, 小川治之(緑川信之, 逸村裕, 金子昌嗣との共著) “理工学諸分野の雑誌構造” **Library and Information Science**, No.20, p.63-80 (1982).
- 斎藤憲一郎, 小川治之(緑川信之, 金子昌嗣, 逸村裕との共著) “自然科学雑誌の諸引用尺度” **図書館学会年報** Vol.28, No.4, p.156-168 (1982).
- 斎藤憲一郎, 小川治之(金子昌嗣, 逸村裕, 緑川信之との共著) “レター誌の特徴” **図書館学会年報** Vol.29, No.1, p.41-47 (1983).
- 斎藤憲一郎, 小川治之(緑川信之, 逸村裕, 金子昌嗣との共著) “理工学雑誌の引用度順位の比較” **情報管理** Vol.25, No.9, p.797-807 (1982).
- 小川治之, 斎藤憲一郎(緑川信之, 逸村裕, 金子昌嗣との共著) “生物・医学雑誌の諸引用尺度” **医学図書館** Vol.30, No.2, p.195-201 (1983).
- 小川治之, 斎藤憲一郎(逸村裕, 緑川信之, 金子昌嗣との共著) “理工学分野の諸引用尺度” **ドクメンテーション研究** Vol.33, No.6, p.273-280 (1983).
- 小川治之 “米国の学習図書館” **塾監局紀要** No.10, p.81-84 (1983).

斎藤憲一郎（上田修一，緑川信之，逸村裕，金子昌嗣との共著）“米国の企業内技術者の情報利用—The Future Group 調査の紹介—” 科学技術文献サービス No.65, p.30-36 (1983).

佐藤和貴（小川裕子，内田兼次，橋弘政との共著）“なかなか入手できない資料とその対応—神資研第265回例会パネルディスカッション—” 神資研ニュース No.152, p.1 (1983).

〔研究発表〕

〔三田〕

長島敏樹“JAPAN/MARCの問題点”ドキュメンテーション・シンポジウム 第12回 1982.6.23 於 機械振興会館（安西郁夫，上田修一との共同発表）

南野典子“EC関係書誌紹介” EDC セミナー 1983.5.26-27 於 同志社大学光塩館

田中美美子“逐次刊行物—収集と整理—” 専門図書館協議会 関東地区協議会 第62回 実務講習会基礎コース 1983.7.11-13 於 東京商工会議所

渡部満彦（パネラー）“大学図書館情報システム化をめぐる諸問題” 大学図書館研究集会 1983.9.12 於 国立婦人教育会館

渡部満彦“コンピュータによる資料の受入” ドキュメンテーション懇談会 第308回 1982.9.24

於 慶應義塾大学医学情報センター

安田博“大学図書館機械化の現状” 初心者のための大学図書館とコンピュータ研修会 第1回私立大学図書館協会東地区部会研究部研修会 1983.9.8 於 東京農業大学

安田博“コンピュータ・ネットワークの現状 パート1 (RLIN)” 三田図書館・情報学会月例会 1983.3.26 於 慶應義塾図書館・新館

〔日吉・理工学〕

小川治之“米国の Undergraduate Library の事情—その管理と運用—” 三田図書館・情報学会月例会 1983.7.9 於 慶應義塾図書館・新館

斎藤憲一郎“著者からみた synoptic journal—比較考察—” 三田図書館・情報学会研究大会 1982年度 1982.11.13 於 慶應義塾大学

斎藤憲一郎，小川治之（金子昌嗣，緑川信之，逸村裕との共同発表）“JCRによる自然科学雑誌の引用尺度の分析” 三田図書館・情報学会研究大会 1982年度 1982.11.13 於 慶應義塾大学

斎藤憲一郎，小川治之（逸村裕，金子昌嗣，緑川信之との共同発表）“2 step map からみた理工学雑誌の特徴—集中度・充足度・連絡度—” 日本図書館学会研究大会 第30回 昭和57年度 1982.10.16 於 武庫川女子大学

小 展 示 ニ ュ ー ス

〔展示期間〕

昭和58年

5月1日～15日

久保田万太郎歿後二十周年記念展示

9月26日～28日

オーストラリア関係参考図書

9月29日～10月15日

折口信夫歿後三十年記念著作展示目録

10月6日～15日

斎藤茂吉歌集・歌論展（塾員島村宏君寄贈）

11月1日～

国際シンポジウム講演者著作展示

毎日

「三田評論」「塾」に紹介された本

随時

新規受入の稀観書

資料 IV

年次統計要覧 <昭和57年度>

慶應義塾大学研究・教育情報センター

I. 図書費 <57年度実績及び58年度予算>

内訳 支部センター	57年度実績 <単位：円>			58年度予算 <単位：千円>		
	図書支出	図書資料費	(計)	図書支出	図書資料費	(計)
三田情報センター	524,560,000	1,836,000	526,396,000	555,722	3,446	559,168
図書館	277,954,000	1,836,000	279,790,000	298,326	3,446	301,772
研究室*	246,606,000	—	246,606,000	257,396	—	257,396
(私大研究設備相当額)	(18,889,000)	—	**			
日吉情報センター	114,059,893	1,760,823	115,820,716	123,050	1,865	124,915
図書館	43,371,062	1,760,823	45,131,885	46,000	1,865	47,865
研究室*	70,688,831	—	70,688,831	77,050	—	77,050
(私大研究設備相当額)	(6,411,000)	—	**			
医学情報センター	107,091,670	2,124,382	109,216,052	116,844	2,230	119,074
"	104,322,020	2,124,382	106,446,402	116,844	2,230	119,074
指定寄付金	2,769,650	—	2,769,650			
理工学情報センター	92,643,759	1,230,270	93,874,029	103,759	1,300	105,059
"	92,643,759	1,230,270	93,874,029	103,759	1,300	105,059
(私大研究設備相当額)	(1,300,000)	—	**			
合 計	838,355,322	6,951,475	845,306,797	899,375	8,841	908,216

注) * 特別図書費は含まず

** () 内は合計欄に加算せず

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時的に手当したものの
本部の図書費は三田情報センター・図書館に含める

II-1 蔵書統計 <年間受入及び所蔵冊数>

支部センター	内 訳	単 行 本			製 本 雑 誌			合 計	
		和	洋	計	和	洋	計		
年間受入冊数	三田情報センター	25,912	26,997	52,909	16,859	8,279	25,138	78,047	
	図 書 館	(17,767)	(14,727)	(32,494)	(11,496)	(2,223)	(13,719)	(46,213)	
	研 究 室	(8,145)	(12,270)	(20,415)	(5,363)	(6,056)	(11,419)	(31,834)	
	日吉情報センター	13,720	5,527	19,247	1,276	2,407	3,683	22,930	
	図 書 館	(10,408)	(2,032)	(12,440)	(1,015)	(31)	(1,046)	(13,486)	
	研 究 室	(3,312)	(3,495)	(6,807)	(261)	(2,372)	(2,633)	(9,440)	
	医学情報センター	1,423	1,326	2,749	987	2,586	3,573	6,322	
	理工学情報センター	1,146	1,089	2,235	1,305	4,013	5,318	7,553	
	合 計	42,201	34,939	77,140	20,427	17,285	37,712	114,852	
	所蔵冊数(累計)	三田情報センター	504,665	459,142	963,807	123,416	101,497	224,913	1,188,720
		図 書 館	(373,261)	(268,786)	(642,047)	(75,361)	(43,916)	(119,277)	(761,324)
		研 究 室	(131,404)	(190,356)	(321,760)	(48,055)	(57,581)	(105,636)	(427,396)
日吉情報センター		171,907	86,833	258,740	17,278	23,545	40,823	299,563	
図 書 館		(120,130)	(13,821)	(133,951)	(11,733)	(253)	(11,986)	(145,937)	
研 究 室		(51,777)	(73,012)	(124,789)	(5,545)	(23,292)	(28,837)	(153,626)	
医学情報センター		22,584	24,881	47,465	37,642	72,604	110,246	157,711	
理工学情報センター		29,765	18,673	48,438	27,898	75,560	103,458	151,896	
合 計		728,921	589,529	1,318,450	206,234	273,206	479,440	1,797,890	

注1) 所蔵冊数(累計)は年間受入冊数から除籍冊数を引いた数値を前年度の累計所蔵冊数に加えたもの

2) 三田情報センター・研究室には図書館・情報学科の製本雑誌を含む

II-2 蔵書統計 <逐次刊行物：タイトル数>

種別 支部センター	カレント			ノンカレント			カレント・ ノンカレント 合計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田情報センター 図書館 研究室	4,581 (1,717) (2,864)	2,766 (694) (2,072)	7,347 (2,411) (4,936)	4,797 (2,924) (1,873)	2,024 (1,132) (892)	6,821 (4,056) (2,765)	14,168 (6,467) (7,701)
日吉情報センター 図書館 研究室	660 (449) (211)	517 (17) (500)	1,177 (466) (711)	281 (96) (185)	539 (3) (536)	820 (99) (721)	1,997 (565) (1,432)
医学情報センター	1,173	1,432	2,605	672	1,021	1,693	4,298
理工学情報センター	1,001	1,162	2,163	1,247	2,084	3,331	5,494
合計	7,415	5,877	13,292	6,997	5,668	12,665	25,957

注) 三田情報センター・研究室には図書館・情報学科を含む

III-1 利用統計 <貸出及び閲覧冊数>

内訳 支部センター	館外貸出			館内閲覧		前年度比 館外貸出(計)
	教職員	学生	(計)	一般図書	貴重書	
三田情報センター 図書館 研究室	8,305 (5,368) (2,937)	103,644 (90,358) (13,286)	111,949 (95,726) (16,223)	— * *	1,534 (1,534) —	1.51 1.47 1.77
日吉情報センター 図書館 研究室	4,709 (2,457) (2,252)	59,519 (59,519) —	64,228 (61,976) (2,252)	* * *	— — —	1.37 1.43 0.68
医学情報センター	—	—	46,052	*	—	1.04
理工学情報センター	—	—	28,768	*	—	1.09

* 開架のため実数不明

III-2 利用統計 <相互貸借(複写依頼を含む)>

内訳 支部センター	依頼を受けた(貸)			依頼した(借)			合計
	国内	国外	計	国内	国外	計	
三田情報センター	1,344	36	1,380	581	225	806	2,186
日吉情報センター	114	—	114	175	12	187	301
医学情報センター	8,819	105	8,924	2,726	64	2,790	11,714
理工学情報センター	27,187	0	27,187	1,319	89	1,408	28,595
合計	37,464	141	37,605	4,801	390	5,191	42,796

Ⅲ-3 利用統計 <複写サービス>

内 訳 支部センター	種 別	学 内		学 外		合 計	
		件 数	枚 数	件 数	枚 数	件 数	枚 数
三田情報センター	M F	15	3,763	28	3,885	43	7,648
	ゼロックス	7,393	214,113	1,417	59,362	8,810	273,475
	オフセット	289	365,710	—	—	289	365,710
	P P C	—	—	—	—	—	1,211,498
	O H P	8	53	—	—	8	53
	ファクシミリ	68	725	—	—	68	725
日吉情報センター	ゼロックス	5,795	39,214	114	2,515	5,909	41,729
	P P C	—	227,972	—	—	—	227,972
	ファクシミリ	23	218	—	—	23	218
医学情報センター	M F	—	5,082	—	—	—	5,082
	ゼロックス	50,261	363,198	91,470	527,835	141,731	891,033
理工学情報センター	M F	24	2,088	2	41	26	2,129
	ゼロックス	21,625	340,515	27,185	277,227	48,810	617,742
	O H P	262	1,673	—	—	262	1,673

注) P P Cはコイン方式のため内訳は不明

Ⅲ-4 利用統計 <レファレンスサービス>

利用者別

内 訳 支部センター	学 内 者		学 外 者	合 計
	教 職 員	学 生		
三田情報センター	1,549	7,378	3,278	12,205
日吉情報センター	243	2,142	590	2,975
医学情報センター	—	—	—	4,217
理工学情報センター	627	2,795	1,610	5,032
合 計	—	—	—	24,429

業務内容別

内 訳 支部センター	文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合 計
三田情報センター	4,266	785	7,096	58	12,205
日吉情報センター	279	225	2,460	11	2,975
医学情報センター	854	86	276	3,001	4,217
理工学情報センター	1,964	254	2,512	302	5,032
合 計	7,363	1,350	12,344	3,372	24,429

研究・教育情報センターでは今年二つの大きなことが始まりました。一つは、日吉キャンパスの学生や教職員の積年の願いであった日吉新図書館の建設が愈々始まったことです。9月28日に地鎮祭が厳粛にとり行われました。この新しい図書館は昭和60年早春に竣工予定です。いま一つは、10月14日8台の端末機が三田情報センターに取り付けられ、グレードアップした大学計算センターの電算機に直結されたことです。情報センターにおける、いわゆるライブラリー・オートメーションの幕開けです。

本誌17号ではこれらのことを中心に論文や記事を集めて刊行することにしました。いずれのことについても長い間の努力の結果であり、関係者の感概は一入でありましょう。しかし、慶應義塾125周年の今年がそうであるように、情報センターにとっても今年は次の発展へのスタートに過ぎないと言うことも合せて肝に銘じておかなければなりません。

「KULIC ノウハウ」は、毎号各情報センターの現状の中から興味深いテーマを拾い、その仕事を担当している職員から報告をしてもらうものです。本号では、三田情報センターからのレポートです。「指定出版社による一括購入方式」と「目録利用案内」は、他の大学図書館では行われていないもので、専門的にみても興味深い小論文で、話題を提供しそうです。

本号から巻末の資料篇に二つの新しい記事を掲載することにしました。「図書館関係英語文献の和文抄訳リスト」と「スタッフによる論文発表・研究発表」です。慶應義塾では研修制度がよく整備されており、いろいろなプログラムがあります。しかし、研修の本来は、個々の職員の自己研修が基盤となるわけで、それがなければ、その制度も生かせません。これらの資料により情報センタースタッフが常々専門の文献に接し、自分の担当している業務や関心のあるテーマに取り組んでいることがわかります。このことが、図書館・情

報学科でのコンティニアス・エデュケーションに結び付けば大変結構なことですが、そこに到るまで少々時間が掛りそうです。

英文抄訳のプログラムについて、ここで少し詳しく述べておきます。このプログラムは、三田情報センター図書館・情報学資料室が毎週発行するコンテンツ・シートサービスの中から、日頃私たちの仕事にかかわりのある主題の論文を選択し、それをセンター職員が分担して読み、誰もが手早く読めるように和文訳にして回覧する、と言うものです。ひとりひとりが英語文献を読むとなると苦勞も多く、大変時間が掛りますが、何十人かで何十かの文献を読み、日本語訳を回覧すれば、時間の節約にもなります。

本号の記事として取り上げなかったことで一つだけ重要なことがあります。昭和60年に国際医学図書館協会が東京で開催されます。国際会議と言うのはその裏方が大変ですが、この会議の組織委員会の事務局が医学情報センターに置かれています。嶋井医学情報センターがその組織委員会の委員長で、大沢副所長はじめ医学情報センタースタッフが裏方で毎日忙しくしています。IFLA 東京大会も昭和61年に開かれる予定と聞いていますが、どうやら、ここ2～3年を境にして日本の図書館員も国際的な活動の場に進出する機会が多くなりそうです。

この編集後記を書いている際中、大変嬉しい知らせが入ってきました。安西三田情報センター副所長が今年度義塾賞の受賞者に選ばれたとのことです。同副所長の受賞は、およそ30年にわたる義塾図書館の発展への功績と、日本の大学図書館界への貢献が認められたものです。図書館関係の受賞者は、津田良成文学部教授（当時医学図書館総務部長）伊東弥之助元図書館副館長、石川博道前三田情報センター副所長に次いで四人目です。この朗報を記してあとがきをめることとします。

（渋川雅俊 10月31日）

編集委員 * 情報センター本部 渋川雅俊 * 三田情報センター 斎藤泰則 * 日吉情報センター 宮入暁子 *
医学情報センター 山中みどり * 理工学情報センター 斎藤憲一郎